

# 仲原善忠と沖縄史研究

——郷土から生まれる歴史観——

並 松 信 久

## 要 旨

仲原善忠（1890-1964）は、沖縄を代表する歴史および地理の研究者である。とくにオモロ研究者として著名である。沖縄県久米島生まれで、戦前期には主に地理の教育者として活躍する。沖縄研究には1939（昭和14）年頃から取り組んでいるが、久米島のオモロ研究が、そのきっかけとなる。そして『久米島史話』（弟の仲原善秀との共著、1940年）など一連の歴史研究を発表している。仲原の歴史研究には、久米島の原体験から生まれる独自の歴史観と文化論が内包されている。仲原は沖縄がヤマトによって逆境におかれていたということだけではなく、沖縄の支配層の下に、さらに抑圧されていた離島の久米島の姿を描いている。

仲原の沖縄史研究は、次の四つの特徴がある。(1) 按司と支配体制、(2) 琉球王国の祭政一致体制、(3) 久米島の経済的基盤、(4) 久米島の地方役人と官僚システム、これらの特徴は久米島独特の思想を反映していた。そして久米島オモロの研究は、上記の(1)～(4)を裏付ける役割を果たしていた。

さらに戦後沖縄の状況を念頭に置いて、次の四つに仲原の歴史研究の特徴がある。(1) 沖縄の時代区分、(2) 琉球と薩摩藩の関係、(3) ペリー来航と戦後の米軍占領、(4) ブラジル「勝ち組」への対応、であった。これらの戦後の沖縄史研究は、近代主義的な様相を帯びていたものの、その基本にあるのは郷土・久米島から生まれた歴史観であった。

キーワード：仲原善忠、沖縄史、久米島、オモロ研究、歴史観

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 地理教育と教師生活
- 3 久米島の歴史研究
  - (1) 按司と支配体制
  - (2) 政治と宗教
  - (3) 経済的基盤の確立
  - (4) 自治と官僚システム
- 4 久米島オモロの研究
- 5 戦後沖縄と歴史研究
  - (1) 沖縄の時代区分
  - (2) 琉球と薩摩藩
  - (3) ペリー来航と米軍
  - (4) ブラジル「勝ち組」への対応
- 6 結びにかえて

## 1 はじめに

仲原善忠（1890-1964、以下は仲原）は、沖縄を代表する歴史および地理の研究者である。とくにオモロ研究者として著名である。沖縄県久米島生まれで、1912（明治45）年に沖縄県師範学校を卒業後、広島高等師範学校（現・広島大学）に入学し、1917（大正6）年に卒業している。静岡師範、青島中学、鹿児島県立第一師範の教諭を経て、1924（大正13）年に東京の旧制成城学園第二中学校教諭となり、同高校教諭、中等部部長などを歴任して、学園経営にも携わっている。この経歴が物語るように、戦前期の仲原は、主に教育者として活動している。

沖縄研究にとりかかるのは1939（昭和14）年頃からで、『おもろさうし』（首里王府が統治下の島々に伝わる神歌を収録し編纂したもの）のなかの久米島オモロ、つまり自らの郷里である久米島のオモロ研究をきっかけに、『おもろさうし』全体に敷衍させていったことに始まる。戦後は1948（昭和23）年に仲原は金城朝永（1902-1955）、東恩納寛惇（1882-1963、以下は東恩納）、比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）らとともに、東京で沖縄の歴史や文化に関する研究団体の「沖縄文化協会」を創設し、その初代会長に就任している（機関誌『沖縄文化』を創刊）。さらに沖縄人連盟会長を務め、「石垣島事件」で米軍捕虜殺害の罪に問われた沖縄出身元兵士たちの減刑運動などに取り組んでいる。また琉球育英会理事や同東京事務所所長なども歴任している。

オモロ研究の主な著作には、『おもろ新釈』（1957年）や、外間守善（1924-2012、以下は外間）とともに著した『校本おもろさうし』（1965年）、『おもろさうし辞典・総索引』（1967年）などがある<sup>1)</sup>。しかし仲原の研究はオモロ研究にとどまらない。戦前には地理に関する著作として『日本外交史』（1924年）や『世界地理精義』（1931年）、そして歴史研究のきっかけともいえる『久米島史話』（弟の仲原善秀との共著、1940年）などがある。また『具志川間切旧記』『仲里間切旧記』などの校注も手がけている。戦後には『琉球の歴史』（1952・53年）を刊行している。これらは集大成されて、沖縄タイムス社から『仲原善忠全集』（全4巻）として刊行されている。

明治以来、数多くの研究者が仲原と同様、オモロ研究をはじめ沖縄の歴史と取り組んできた。これらの研究成果は、沖縄史の特異性を解明したものであった。しかしその多くは、沖縄の通史を組み立てることに終始しているという感じが否めない<sup>2)</sup>。仲原の場合、オモロ研究から出発し、その研究成果をふまえて歴史の視野を拡大し、当時の沖縄というものの認識にとって必要な沖縄史の問題に取り組んでいる。しかもそこには、仲原が生まれ育った久米島の原体験から生まれる独自の歴史観と文化論が内包されていた。仲原は沖縄がヤマトによって逆境におかれていたということだけではなく、沖縄の支配層の下に、さらに抑圧されていた離島の久米島の姿を描いている。これが仲原の研究の大きな特徴であり、研究の出発点である。

オモロ研究は一般的に伊波普猷（1876-1947、以下は伊波）に始まるといえるが、伊波と仲原とは一線が画される<sup>3)</sup>。たとえば、琉球王国が解体されて、日本本土に組み込まれるというのは、伊波は一種の奴隷解放であり、ひとつの解放であると受け止めていた。これに対して仲原はこれを解放ではなく、歴史の必然であると解釈した。この点では仲原は近代主義的な様相を帯びていたといえる<sup>4)</sup>。このことについて、「仲原さんが伊波氏を学問上の先輩として尊敬しておられたことも、また、仲原さんのゆかしさであったが、しかし、伊波氏の学問の傾向にぼつりぼつり批判のことは述べられるとき、わたくしは、仲原さんの学問が地味で、手がたく、そして、世のひとびとの目には立たないものであろうと感じた」<sup>5)</sup>という評価が、亀井孝（当時、一橋大学教授）によってなされている。

沖縄の歴史研究では著名な伊波、比嘉、仲原とは、それぞれ7歳違いであり、伊波が1876（明治9）年、比嘉は1883（明治16）年、仲原は1890（明治23）年に生まれている。この世代の差は年齢差よりも大きなものがあり、3名は思想や学問において、それぞれ独創的なものがある<sup>6)</sup>。もちろん3名が育った歴史的・社会的背景は、その独創性に影響を与えている。本稿では仲原における沖縄史研究の独創性を考えていく。とくに仲原の研究において、戦争前後という歴史的背景と、郷土である久米島という社会的背景がどのように反映されていたのかを中心に考えていきたい。仲原に関する先行研究は数少ない。そのなかでも歴史的背景と社会的背景を結びつけて論じている研究は、ほとんどないといえる<sup>7)</sup>。

戦後、外務省内において沖縄の歴史講座が開かれた。講師として二人招かれている。ひとり東恩納であり、もうひとり仲原であった<sup>8)</sup>。東恩納は古琉球の歴史について、仲原は沖縄現代史について、それぞれ講義をしている。この時、東恩納は沖縄史の専門家として招かれているが、仲原は必ずしもそうではない。オモロ研究ではなく、現代史ということなので、専門家というよりも知識人のひとりとして講義をしたといえる。専門家として評価されていないというわけではないが、仲原はアカデミズムのなかで地位を得ていたわけではない。この点も仲原に関する先行研究が少ない理由のひとつと考えられる。

以下では、戦前の教師としての仲原の活動、久米島の歴史研究とオモロ研究をきっかけとする沖縄史研究、そして戦後の沖縄がおかれた時代背景にもとづく歴史研究の順に、仲原の事績を追っていく。なお本稿の引用文中には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実であることを重視して、あえて訂正を加えていない。また引用文中には読みやすくするために、句読点を一部加えた箇所がある。

## 2 地理教育と教師生活

仲原は戦前の約30年間にわたって、小学校、旧制中学校、七年制高等学校、師範学校、高等師範学校などで、主に地理の教師として教鞭を執っていた。その関係で地理教育に関する著書や論考が数多くある。仲原は1924（大正13）年4月から成城第二中学校（1926年以降は成

城高等学校)に着任する。仲原の教師生活においては成城での着任期間が最も長く、専任として1939(昭和14)年7月までの15年間、その後、非常勤講師として1946(昭和21)年10月まで在職している。専任として勤務している期間は、教師としての仕事だけでなく、学園全体の運営に関わる仕事にも携わっていた。

成城において仲原の担任するクラスの生徒であった中村哲(1912-2003、後の法政大学総長)は、教師としての仲原について、「当時仲原先生は戦前の自由主義教育のメッカであった成城学園の中心にあり、その創設者であって日本の教育思想家として第一に挙げられる澤柳政太郎博士の内面に触れていた人である。私は先生とよく論じ合い、語り合ったものであるが、青波の寄せる遠い島から渡ってきた人だという感じが、なんともいえない浪漫的な親しみを加えたものであった。その先生には、前半生の教育に熱情をそそがれた時代と後半生の学究として不朽の業績を残された時代がある。しかし、その生涯を貫いているものは、明晰な判断、鋭い人間観察、強靱な意思力、それが一つの反骨によって支えられているという点であった」<sup>9)</sup>と回顧している。沖縄出身の仲原は、自由主義教育の雰囲気の中で教育に熱心に取り組み、その後、後に研究生活に入った。

仲原はこの間、精力的に地理教育に関する著書や論考を執筆している。たとえば、『日本外交史』(イデア書院、1925年)、『理法探求日本地理原論及細説』(大同館書店、1925年)、『理法探究日本地理精説』(1932年、地理学教師の文部省検定試験を受験する際の重要文献)などである。1924(大正13)年から1938(昭和13)年までに、仲原は約22の著書(共著も含む)と論考を発表している。それら地理教育に関する成果を出す理由を仲原自身が三つあげている<sup>10)</sup>。一つは地理学の目的である自然と人間との関係を精査しているものが少ない。そこで地理学の目的を基調とする研究成果を発表している。二つは地誌類が断片的な記述にとどまっている一方で、地理通論(理論)は抽象論になってしまっている。そこで実際と通論とを兼ね備えた総合的な地理をめざした。三つは学生の自習的方法が強調されているにもかかわらず、依然として講義的教授法が行なわれている現状にある。そこで教員と学生との共同研究の基本となるような刊行物をめざした。仲原は実際の自然や事物の観察を通して、教員と学生がともに研究することによって、それを理論へと高めていくことを重要視したようである。

仲原は教師として地理教育に熱心に取り組んだが、1939(昭和14)年に教師を辞めている。その後も非常勤として勤めているものの、約30年間にわたる教師生活を辞めている。この辞職理由は明確になっていないが、1943(昭和18)年に仲原は「ようやく戦争は泥沼の様相を呈しはじめ、専門の地理学は軍事地理学の色彩を濃くせざるを得なくなった。失望して、この方面の研究を放棄した」<sup>11)</sup>としている。仲原は軍事色が強まるにしたがって、それに染まってしまう地理学に失望したと考えられる。仲原がめざした地理学とは逆の方向に、つまり実態とかけ離れた地理学が広がった。仲原は地理学の放棄とほぼ時を同じくして、沖縄研究を始めている。そして前述の三つの理由を、沖縄研究において実現していこうとする。

### 3 久米島の歴史研究

仲原が沖縄研究を始めたきっかけは、いくつか考えられるが、そのひとつは1936（昭和11）年に久米島の仲里村の旧家で発見された『久米仲里旧記』という古文書であった<sup>12)</sup>。この発見に柳田国男（1875-1962、以下は柳田）、伊波、そして仲原が注目した。『久米仲里旧記』の内容の多くの部分は、『琉球国由来記』（1713年）のなかに転載されていなかった。しかも転載されていない多くの部分は、仲里の村立ての歴史に関する部分であったので、『久米仲里旧記』は貴重なものと考えられた。柳田は仲原と共同研究を始めたが、研究の途中で両者の意見に齟齬が生まれ、研究は中断する。この柳田とのトラブルによって、『久米仲里旧記』の解読はそれ以後、仲原の手によって行なわれたものの、解読したものが公刊されることはなかった。しかし活字とならなかったとはいえ、沖縄研究を『久米仲里旧記』から出発したことは、仲原にとって歴史や文化を国家レベルから研究するのではなく、村落レベルから、とくに郷土のことから研究するきっかけを与えた<sup>13)</sup>。

仲原が本格的に沖縄研究に着手したのは、同じ久米島に関連して、1940（昭和15）年に実弟の仲原善秀と共同で執筆した『久米島史話』（潮音社）<sup>14)</sup>の刊行であった（共同執筆となっているが、年中行事と案内記以外は、すべて善忠の執筆である）。この著書において仲原は、自らの生活経験や生活環境を客観的に見直すことによって、沖縄史の本質に迫る。この場合の「客観的」とは、広島高等師範学校時代に学んだ「経済的發展段階説」を応用し、社会（村落）は経済に基づいて組み立てられ、その社会の動きこそが歴史になるという理論を使っているという意味であった。この意味で理論的に久米島の歴史を説明しようとした。仲原による久米島の歴史研究では、主に4点のことに焦点があてられている。すなわち、(1)按司と支配体制、(2)政治と宗教、(3)経済的基盤の確立、(4)自治と官僚システムについてである。

#### (1) 按司と支配体制

仲原は経済的發展段階説にもとづいて、久米島の歴史を部落生活時代、按司時代、旧藩時代、明治大正時代の四つの時代に区分する。旧藩時代とは主に琉球王国の時代である。久米島は琉球王朝と複雑な関係にある。琉球王朝に征服される以前に久米島は独自の固有性をもっていたが、征服後もその独自性もち続けている。その固有性や独自性を表現するために、仲原は主に「按司」に注目する。

按司とは12世紀頃から琉球各地にいた豪族を意味する。琉球では中部の浦添按司、南部の大里按司、北部の羽地按司が勢力をもち、三大按司といわれている。15世紀の琉球王国の統一後は、按司は国王から任命された領主の位階名となった。この間の状況は、「久米島に来て、各要所に城を築き、島人達を支配下においた按司たちは、いつ頃、沖縄本島のどの地域からやって来たのかは、今のところはっきりしておりません。しかし、遅くとも尚巴志が三山統一

した一四二九年前後あたりだろうと思います。沖縄本島内での戦乱を逃れて来た者達だったのか、それとも他の目的をもっていたのかは定かでない<sup>15)</sup>とされている。

按司の語源については、仲原をはじめ多くの研究者が議論している<sup>16)</sup>。たとえば比嘉は、著書『沖縄の歴史』(1959年)において、「按司というのは土地人民を支配する領主ともいうべきもので、按司と書いて、あじ又はあんじと読む。按司はあるじの転訛だとは伊波普猷氏の説で、その後、奥野彦六郎氏は、これを宮古語のあず(言う)から来たもので、「命令する者」の意であるという新説を提示し、仲原善忠氏は、古事記にみられる吾君(あき)という語と相通ずると説き、未だ定説がない<sup>17)</sup>としている。比嘉が取り上げた語源説以外にも、方言研究の宮良当社みやながまさもり(1893-1964)の「吾父」説(1960年)や、南方語にその語源を求める説もある<sup>18)</sup>。しかし比嘉の言うように定説はない。

比嘉は部落生活時代から按司時代へと移行する社会情勢についても説明する。比嘉は

同族意識もなく、生活にも相異のある部落と部落との相反する利害関係は、どう解決されたろうか、実力による解決、すなわち闘争によって部落の利益を保護し、かつ優位をちかとることであった。闘争のためには胆力ある指導者の下に力の結集が必要である。かくて指導者ができ、部落と部落の争いの解決のみならず、強い部落は隣接の弱い部落を侵略してその統制の下におき、労役に服せしめ貢租を徴し、もって部下を養い、城を築き、つぎつぎと領地をひろめ、按司という武力による支配者となる<sup>19)</sup>。

としている。

部落社会の発展は、必然的に他部落との接触をとめない、そのことによって起きる生存競争のために、武装をする必要が出てくる。首長のアサ(アサイ)は、部落時代のように長老の座に就くだけでなく、その社会的責任が重くなり、そのために武力をもった支配者となっていく。これが按司であり、アシー、アジー、アジ(アヂ)とよばれるようになった。

ところで久米島は16世紀初頭に首里王府に征服されるまで、独立した地位を保っていた。久米島には、もともと親方とよばれる集落(共同体)の代表者がいた。親方は武力を背景に住民を支配することはなかった。しかし久米島の外部から来た按司は、住民を武力によって支配し統治する。親方はこの按司の統治秩序に組み入れられていく。久米島の政治エリートである親方や、宗教エリートであるノロ(後述)は、武力で侵入してきた按司に対して不満はあったものの、抵抗しなかった。むしろ按司に積極的に協力している。

たとえば、仲原は「堂のひや」という親方と、外部から入ってきた按司との主従関係について説明する。その関係は表面的なもので、虚構とみなしている。そしてこの「堂のひや」は主君である按司を殺害している。仲原は、

按司達が城をつくり、武力で人民を支配する前は、そんな主従関係はなく、堂のひやは仕方なく中城按司と主従になったのだ。しかもこの按司たちはどうも沖縄本島から侵入して来たらしく、城を作り「人民共租税ヲ持ッテ来イ、持ッテ来ナイト承知センゾ」と云うわけで、堂のひや達から見れば心から服しているわけではなく、むつかしく言えば妥協していたのだから、始っからの主従関係ではない。私は決して堂のひやに賛成するわけではない。殺すのは悪い、また殺さんでもいろいろ方法があったと思うが、矢張りあの人は頭がよく活動家で冒険心に富み、また野心もつよく、人民のために季節を教えたり養蚕を教えたりしたが、また非人情なこともした一種の英雄的の人だったと思うね<sup>20)</sup>。

と語っている。

久米島の親方である「堂のひや」が、外部から侵入してきた按司に対峙して、伝統的な社会を保全するために、彼我の力関係を考慮した上で行動した。『久米島史話』が刊行された1940（昭和15）年という時期から、主君殺しである「堂のひや」を肯定的に評価することは、戦時中の「忠孝」が強調される時代状況のなかで特異なことであった。仲原の言説を敷衍するならば、いかなる政府（首里王府、大日本帝国政府）に対しても、久米島の住民は仕方なく従い、妥協しているということになる<sup>21)</sup>。

「堂のひや」が居た中城城が落城して3日後に、首里王府軍は同じ久米島の具志川城の攻略に取りかかる。具志川按司（親方）の乳父の「よなふしのひや」が首里王府軍に協力し、具志川城も落城する。仲原は「よなふしのひや」について「彼の名前の「よなふし」も「世直し」即ち世の中をなおすと云う意味で、いろいろ部落のためをはかり「世なおし」をやった人望のあった人と考えられる」<sup>22)</sup>と説明する。「よなふしのひや」は、かつての主君であった具志川按司を裏切って、首里王府軍に付いた。しかし実際は久米島の伝統的な社会を守り、その利益を図ったのである。

「堂のひや」と「よなふしのひや」は同じような行動をとっている。主君を裏切り、外部からやって来た支配者に協力しているにもかかわらず、地元の久米島では英雄に匹敵する扱いを受けている。「堂のひや」と「よなふしのひや」には、主君に対する忠を自らの生命を賭して尽くすという姿勢が皆無であるにもかかわらず、その評価は高い。ここに久米島独特の思想がある。主君から天命が離れば、もはや主君として仕える意味がないということである。天命によって外部からの支配者を正確に見極めて、現実主義的に強い者に寄り添っていかうとする島の人々の生き残り戦略ともいえる。首里王府が久米島の新たな支配者になるというのが天命であり、天命を<sup>あらた</sup>革める（革命）ものであるから、それにしたがうのが倫理的にも正しいことになる<sup>23)</sup>。この点で「堂のひや」と「よなふしのひや」は天命にしたがって行動したといえる。

しかしその一方で、首里王府に敵対した中城按司や具志川按司が批判されているというわけでもない<sup>24)</sup>。久米島には二人について好意的な記録が残っているとともに、『おもろさうし』

でも、首里王府が編纂しているにもかかわらず、二人を讃える歌謡が含まれている。仲原は、

具志川按司は「死ぬ覚悟を示し九歳になる長男も自分があの世界につれて行く」と言っているが果たしてどうなったか、死んだとは思われない。現在具志川村に「まにく樽按司の子孫」と言われる家がいくつかあり、名乗りに「智」の字を用いて居る由。あるいは按司達は何処かかくれていたかも知れぬ。(中略)中城按司は落城の時、シラシ山に入り、行方知れずとなっているし、その長男(私は次男ではないかと考えている)は生き残っていたことが、伝説にもまた仲里旧記、球陽等にもあり、太史氏と言う家が、その子孫だと言われ、真謝に三軒、仲地に五軒、西銘、山里に各一軒ある<sup>25)</sup>。

と語っている。仲原は具志川按司や中城按司の子孫は生き残っているという見解をもっている。このことから久米島には、没落した旧支配者を根絶するという考えはないことがわかる。旧支配者であっても、それを絶やすことなく、再び久米島の一員として受け入れるという考え方があ

## (2) 政治と宗教

仲原は1947(昭和22)年にオモロに関する論文として、古代信仰を解明した「セヂ(靈力)の信仰について」<sup>26)</sup>を発表している。この論文は古代沖縄人の信仰の対象であった不可視の靈力セヂの本体を明らかにするものであった。稲に害を与える病気、害虫類の駆除のための呪いについて、仲原は解説する。この呪いを人間にかけることも可能であるので、政治的な呪いについても論文で取り上げている。仲原は、

島津軍の侵入に対するオモロ(三ノ一〇)の最後の句は「肝が内に思はゞ肝垂れしめれ、あよ(肝)が内に思はゞ大地に墜とち捨てれ」と呪詛している。すなわち島津の兵が「敵意を起した瞬間に頭の働きがとまる様に、心の内に害意を持つと同時に、大地の上に倒れるように」との呪いで、恐らく聞え大君御殿ではもの凄い加持祈祷が行なわれたであろう<sup>27)</sup>。

と説明する。

そして按司を支配する按司、すなわち「按司襲い」が王または大世の主であり、最も靈力<sup>セヂ</sup>の高い太陽であった。王という名称は中国から与えられたもので、それ以前は社会全般の支配者という意味で、「世の主」といわれ、あるいはその靈力を人々から讃えられてテダと称した<sup>28)</sup>。仲原は後に発表する『おもろ新釈』(1957年)のなかで、太陽を意味するテダ、フィー、テルカハ、テルシノという語について、それぞれに使い分けがあることを、初めて指摘してい



る<sup>29)</sup>。仲原はテダが物理的な太陽を意味するのに対して、テルカハ、テルシノは太陽の神性を示すものであるという考えにもとづき、カハ、シノは太陽の古名であったと推定している。

久米島オモロのなかでは、国王のことを「首里杜按司襲い（真玉杜按司襲い）」（巻11-501、巻11-558）と、わざわざ「首里杜（真玉杜）」を付して表現する場合がある。按司襲いという表現は一般的に国王を指すが、久米島オモロではほぼ按司のことを意味している。したがって久米島の按司は、国王と並び立つ存在であるかのようにうたわれている<sup>30)</sup>。また第二尚氏時代以降、王権を天上の世界（おぼつ）に結びつけ、首里王府は王権の絶対化を図ろうとするが、その「おぼつ」が久米島オモロのなかに出ている。これは『おもろさうし』の編纂者が、久米島に国王に匹敵する権威の存在を認めていたことを意味する。

支配・被支配の関係において、祭政一致体制も関連する。久米島を含む沖縄には、祭政一致体制の名残がある。首里王府が久米島に影響力を拡大した時期に、久米島は土着のノロ（巫女）である君南風を、首里王府の高級神女として認知させる。仲原はこの間の状況を、

日本内地も沖縄も大昔は政まつりごとと祭まつりは一つで、いわゆる祭政一致の時代がある。久米島も同じことで、「雨を降らして下さい」「害虫が発生せぬように、稲がよくみのるように」「疫病が流行せぬように」いろいろお願を致し、また願がかなえられた時は、お礼を申し上げる。これがお祭りで、また政治の大部分である。（中略）その時にはいろいろの御馳走を作って、神様にも上げ、また祖先の霊前にあげる。神に仕えるものは女に限られ、これをかみんちゆ神女と呼び、久米島には「せの君」「よよせ君」「ちんべえ君南風」「おもひ君」など名高い神女が居った。尚真王の時から君南風が一番上の神女になり、その下にのろ（ヌールと言ひ仲里五人、具志川五人）ねがみ根神・うちがみ掟神その他の神女がおかれた<sup>31)</sup>。

と説明する。この根神は氏族的団体の神女のことで、ノロはやや後に地域的団体の神官として任命される。

仲原は久米島のノロである君南風について、物語であると断った上で、

弘治十三年（一五〇〇年、今から四百四十年前）と云う年に、首里の王が八重山を征伐せられるについて、首里の神の御告げがあって、「八重山の神がなびけば、人間は自然と降参するから、君南風をつれて行け」と仰ったので、征伐の船は久米島に寄って、仲地の君南風を乗せて行った。船が八重山につくと、向こうの兵隊がたくさん浜に押しよせて来たので、船の上にたいまつを積み、夜中に火をつけて陸の方に流した所が、八重山の兵隊はみんなそこに集まった。その隙に別の所にドッとばかり上陸し攻め立てた所、八重山の神が先ず君南風と和睦したので、人間共もどうすることも出来ず、とうとう降参したと云う。八重山を引きあげて、君南風も首里に参り、王様にも御目にかかり、御褒美とし

て「チヨノマクビ玉」と云う沢山の玉と、ヒララシヤ原という地所を頂戴して帰って来た<sup>32)</sup>。

と説明している。

君南風の物語は、首里王府による八重山諸島への進攻と一体となつてつくられている。首里王府に進攻された久米島は、首里王府の尖兵となつて、八重山進攻に加わることによって、琉球王朝における支配者側の地位を得る。首里王府の尖兵である君南風は、八重山側に対して戦つても無駄なことを認識させる。この八重山征伐のときの君南風を歌つたオモロは、『おもろさうし』に載っている（たとえば、11巻-586）<sup>33)</sup>。君南風が八重山に進攻した時期は、久米島では旧来の按司（親方）支配が続いていたので、首里王府の支配が確立していたわけではなかった<sup>34)</sup>。首里王府による支配の確立過程であつた。

首里王府による久米島の支配や八重山の進攻があつた時期は、首里王府では第二尚氏三代目の王となつた尚真王（在位1477~1526年）の約50年間にわたる治世の時であつた。この時期は王権強化策の総仕上げとなる時期でもあり、名実ともに国王を頂点とする強力な中央集権国家体制（=古代国家）が確立されつつあつた。それまで各地に勢力を温存していた按司を、すべて首里に集居させ、王府内の官僚群として再編していた。按司は武装を解除され、旧領地の土地と人民に対する直接支配権を奪われる。そして王府内に序列化して配置された官僚として、国王の政務を補佐する役割を与えられた。その限りで家族の生存と、身分や地位が保障された<sup>35)</sup>。

それと並行して、各地のノロ（女神官）を、首里王府の「きこえおおきみ聞得大君」（王女または王の姉妹が就く最高の神職）のもとに統一・序列化して、祭祀（=イデオロギー）の面から中央集権体制が補強された。首里王府は集落の祭りを司るノロに着眼して、国家体制を強化するために、政治のなかに取り込んだ。そして政治の面だけでなく、宗教の面においてもヒエラルキー化して、国王と聞得大君の一元的統制下に置いた。それによって首里王府は支配領域の拡大と支配の強化をはかっていくことになる。

国家組織の頂点に聞得王君という最高の位をおいて、その下にノロをおいて神事を行なうという体制である。15~16世紀にかけて、ノロ制度は完成したといわれている。しかしこのノロ制度のなかに、ノロとほぼ同様の役割を果していたユタは、制度のなかに組み込まれていない。この理由はわかっていないが、ユタは逆に琉球王朝の弾圧の対象となつていく。弾圧のためにユタは身を潜めるように生きていく。ユタは近現代になつても弾圧の対象になつている。ユタという呼称の代わりに、カミンチュ（神人）という呼び方も生まれている<sup>36)</sup>。

仲原はこのユタについて、

沖縄には昔からユタと言うものがあり、いろいろと根拠のないことを言いふらし、神の崇

りだの祖先の崇りだのと、まことしやかに言いふらすものがいて、人民に害毒を流している。神は人民に幸福繁栄を賜わることであっても、正しい者に崇りをなすことはない。いわんや祖先が子孫に罰を下し、たたりをなすと考えるのは誤りであろう。心を正し真心を尽し以て神を敬する者、祖先を祀る者は、譬えその形式は昔と異なっても、或はその外形は貧弱でも、これを喜びこそすれ、これにたたり、これに罰を下すなどと考えるのは誤りであろう<sup>37)</sup>。

としている。これは仲原がユタの弾圧を正当化していることを意味するものではない。仲原は実証を重視する立場をとっているが、神話を実証科学の観点から批判しても意味がないと考えている。仲原は神話を忌避するのではなく、その解釈を試みるべきであるとしている。この姿勢は仲原の歴史観へとつながっていく。

### (3) 経済的基盤の確立

仲原は『おもろさうし』11巻と21巻の分析を通して、15世紀の久米島がかなりの強国であったことを指摘する<sup>38)</sup>。久米島が首里王府の軍門に降るのは、16世紀初頭の1510年頃であるので、それ以前の久米島は独立した国家のように、沖縄本島、ヤマト、中国、東南アジアなどと幅広い交易を行っていた。久米島の具志川には「やまと泊」という良港があり、ヤマトの船が往来したばかりでなく、中国や東南アジアとの交易を行なう際の中継地点として、大きな役割を果たしていたと考えられる<sup>39)</sup>。

たとえば、『おもろさうし』(11巻と21巻)には、「一具志川の真玉内はげらへて 良くげらへて 勝りゆわる精高子 又金福の真玉内はげらへて 唐の船 せに金持ち寄せるぐすく 良くげらへて 又大和船 せに金持ち寄るぐすく」<sup>40)</sup>というオモロがある。それに関して、仲原は「このおもろ(おもろさうし十一ノ二七、二一ノ一一四)は、「具志川城を立派に築いた、勝れたる按司、唐やまとの船がやって来て銭、黄金をもちよせる城」と言う意味らしい。黄金でなくても貿易船の出入することを謡ってある」<sup>41)</sup>と説明する。「ぐすく」は城であり、「せに」は酒で、豊かさの象徴であり、「金(こがね)」は黄金と財宝を意味している。

久米島が独立国家として成り立ち、貿易で潤っていたのは、その背景に経済力があったからである。仲原は、

日本も沖縄も初めは刃物としては、石を使用した。次に銅、その次が鉄ですね。沖縄の歴史でも、察度と云う人が浦添の牧港で内地人から鉄を買い込み、農具を作って人民にあたえ、だんだん人望を得て、遂には王になった。鉄は今も昔も大切なもので、久米の島をまた「かねのしま」と云っているのは、あるいは島尻で鉄を造ったのではないかと考えられるが、今の所ははっきりは言えない。金が出たことはオモロ十三ノ二二四に、「くめの島あ

つる、つしやこがねわたち、あぢおそいにみおやせ、又かねのしまあつる」とあり、久米の島にある玉（ツシヤ）黄金を、首里の王に奉れとの意味らしい<sup>42)</sup>。

と説明する。仲原はオモロ研究を根拠に、久米島にはかなりの経済力があつたと考える。

「つしやこがね」（粒子金）は磁鉄鉱であり、久米島で産出された。しかも鉱物資源に恵まれていたのみでなく、冶金術も発達していた。久米島は高度な技術が発達し、活発な貿易によって経済が支えられていた。しかし久米島で豊かな生活を送るためには、資源や高度な技術だけでは不十分であり、もっとも基本的な物資である食料の確保が不可欠である。

食料について仲原は、

沖縄の神話によると初め米、麦、粟、豆、黍の五穀を天に乞うて植えたとなっている。米については久米島にも一つの伝説がある。昔、久米島儀間、ああら嶽の下に稲二本生じているのを、儀間の留戸長武と云う者、これを発見した。稲の様子が普通とちがっているので、深くこれを珍らしがり、人が取らぬように看視し、熟させた所が、粒が多くまた味も甚だよいので、この実をだんだんふやし遂に島中にひろがり、沖縄の人もこれをきいて、皆この実を求めて植えたと云う。併しこれは稲の起源ではなく、良い稲がひろまったと云うことである。五六月の稲穂祭りや、その他の行事が殆んど稲の成長を祈っていることから見ても、稲がおもな作物であったことがわかる。甘藷もさきに話した南蛮に行った西銘の娘の話に出ているが、これは支那から沖縄に、そして沖縄から久米島に伝わったのでしょう。慶長十年頃、だんだん沖縄にひろがったが、栽培法も幼稚で宝暦（一七五一）の頃から年二回の収穫が出来、だんだん主食物になって来るので、按司時代以前は未だ米粟麦を主食としていた。魚貝類は勿論盛んに取ったと思う<sup>43)</sup>。

と記している。米の由来や、甘藷が久米島に受容された経緯について言及している。按司時代以前に主食は米粟麦であり、甘藷は18世紀中頃から主食になっていったようである。

久米島は経済においても琉球王国への対応を迫られた。政治的・宗教的支配と同時に、琉球王国は経済的あるいは財政的基盤を、より強固なものにしようとする。この基盤は主に二つあった。一つは対外貿易からの収入、二つは租税収入である。琉球王国の経済的支配に対して久米島は対応しなければならなかった。首里王府の統治下に入る前の久米島は、中国との直接貿易によって、経済的利益を得ていた。しかし中国貿易は、首里王府の専管事項となったために、久米島は撤退を余儀なくされた。久米島は貿易による経済的利益の損失を、灌漑による農業生産性の向上と、養蚕技術と高度な技術を駆使した細織物によって補っていく<sup>44)</sup>。また首里王府からの徴税についても、久米島に一定の歩留まりがあるような枠組みをつくっていかうと試みる。久米島では、按司が連れてきた外部の人が直接、徴税に従事したのでは、島民との軋轢

が強まってしまうと考える。そこで「堂のひや」が徴税請負人となる。この役目を果たすことは「堂のひや」にとって屈辱的なものであったのかもしれない。しかし「堂のひや」は、あくまでも久米島という地域の利益を守るために必要な行動であると考えたようである。

久米島は貿易による経済的損失を、地域の産業振興で補っていく。時代は外れるが、本格的な産業振興を迫られたのは、1609年の薩摩藩の琉球進攻の頃からであった。薩摩藩は首里王府に代わる新たな支配者である。「慶長一四年薩摩の琉球入り後、直ちに検地が行なわれ、土地の石高が定まって租税が課されたが、久米島はどういういきさつからか、田畑共に地租を米で納めさせられた。そのために従来の稲作のしきたりでは間に合わなくなり、それに人口も増加するので、いや応なしに米の増産にせまられ、一七世紀の初め頃には、前の儀間道真や仲村渠昌興の水利施設のような、大がかりな事業も行なって水を引き、田の面積を拓げて行った」<sup>45)</sup>とされる。水利施設の充実が図られ、水資源の開発がなされた。久米島には自然の泉が多数あり、それらをせき止めて水を引き、ため池が造られた。

さらに久米島では、防風林の整備とともに、山林の総合的な開発が行なわれている。とくに重視したのは杉の植林である。杉は当時の帆船のマストとして使われた。もっとも「杉はもともと久米島の山にはなく、その植付けや挿穂は、仲里は一七三一年、具志川は一七四二年に大々的に行なわれたように記録され、桑・ソテツの植付けも、その前後に広く行なわれ、チャーギの植付けや播種は、具志川間切では一七一六年に、仲里間切の記録ではそれより一七年も後れて、一七三三年に行なわれている」<sup>46)</sup>とされている。久米島では水利開発と造林が総合的に行なわれた。このような総合的な開発は、明治期になって琉球処分後、機能しなくなり、崩壊してしまう。

#### (4) 自治と官僚システム

琉球王国時代には、宮古や八重山と比較して、久米島では広範な自治が認められていた。首里王府から役人（在番）が派遣されたが、その下で地頭代以下の地元の役人が勤務する体制がとられた<sup>47)</sup>。地頭代には広範な自治権が与えられたが、公式の系図をまとめることは認められていなかった。首里王府下において士族層は、すべて家譜を有していた。そこで「1758年、久米島の地方役人は家譜（系図）をまとめることを願っていたが、認められなかった。久米島の行政機構は、沖縄島の間切番所とほとんど同じであり、久米島の地方役人に家譜の編纂を認めると、それが他地域にもおよぶ恐れがあったからだと思われる。そのため廃藩後の戸籍では、久米島の地方役人は士族ではなく平民とされた」<sup>48)</sup>。この場合の間切というのは、現在の「村」にあたるもので、「ま」は島・処の意で、間切とは「区切」・「処切」のことである。ひとつの間切の集落数は、多いところで23ないし24集落、少ないところで5ないし6集落あった。

仲原善秀は首里王府の官僚システムに包摂されていない久米島の習俗や行動原理に触れている。久米島に残っている『三鳥論』という文書を手がかりに説明している。仲原善秀は「この

文書は寛政一〇年（一七九八）に起った「官生騒動」のために、久米島に流刑になった松永親雲上が、鷺・隼・鳥の三鳥の口を借りて、政府の悪政を諷したという伝説があるようだが、久米島や八重山にある文書では、政府の悪政を諷した文句是一片もなく、終始久米島の産業や政治・風俗を風刺し、役人や島民の怠惰無気力、風俗の頹廃を挙げているのであるが、この文書がいつ書かれたかは明らかでない。もしこの文書が「官生騒動」のあった寛政九年前後に書かれたのなら、長年の疫病の後の人心荒廢の産物として受け取られるが、かんじんな書かれた年度が不明である<sup>49)</sup>としている。『三鳥論』の刊行年が正確にわからないとしても、おおよそ19世紀初頭のことであり、その頃の役人や島民の荒廢状況を知ることができる。仲原善秀は『三鳥論』を引き合いに出して、久米島の現状を批判している。

ところで久米島には他の島とは異なる特徴がある。それは文字による記録を尊重する文化をもち、離島でありながら、多数の文書記録が残されているという点である。これについて仲原は、

慶長以後（琉球が島津の支配になった）だんだん学問をする者がふえたことは、これらの文章を見てもわかると思う。しかし首里には国学以下相当な学校があったが、田舎の者は勿論入れない。それ故各間切に一つずつある稽古所（仲里は真謝・具志川は西銘）で三字経とか二十四孝のような平易な漢文手紙文・ソロバン等を学ぶだけである。これもしかし奉公人と言われる家の男子だけである。それから十七八歳に首里の領主の家に参り、御奉公…使い走り等の雑用…をやりながら、そこらの人に教えてもらう。非常に心掛のよい人でない限り、学問を味うことは出来ない。その様にして二十歳位の時に試験を受けて、テクグ文子になりめざし目指・うつつ掟とだんだん昇進するわけで、学問するのは役人になるためであった。しかし中には四書五経のような相当難しい漢学をやった人もいたことはいたようだ<sup>50)</sup>。

と説明している。

久米島に文書記録が残っているのは、学問が盛んであったことを意味する。そして学問をする理由は役人になるためであった。ここで奉公人というのは、下級官吏のことを意味する。久米島出身者は首里で学んだとしても、首里王府ではエリートになれない。久米島出身者の頂点は、地頭代である。この地頭代を中心とする知的ネットワークがつくられる。地頭代という地位が、久米島の島民がもつ伝統と、首里王府の支配イデオロギーである儒教思想とが交錯する立場となる。したがって地頭代は庶民の論理と支配者の論理の双方が理解できる地位であったといえる。

琉球王国では、一般的に間切と村に管理機関として、間切には番所、村には村屋が設置されていた。番所には地元の有力者から任じられた地頭代をはじめ、首里大屋子・大掟・南風掟・サバクリ西掟の五捌理と、総耕作当（農耕の管理や指導）や総山当（山林の管理）などが置かれた。村

屋には掟という役人が配され、間切役人と連携して村の管理にあたった。そしてそれぞれの役所には文子<sup>テウヅ</sup>という<sup>じかた</sup>地方役人が詰めていた。仲原によれば、それぞれ試験があり、それによって昇進していくシステムがとられていた。

文子は昇進システムの最初の段階であり、いわば見習い吏員のことである。見習いであるために薄給であったが、事務処理能力においては高給の老朽吏員に優っていた。明治期になって沖縄の地方自治制度を調査した一木喜徳郎（1867-1944、以下は一木）は、文子の存在に注目している。もし文子を廃止すれば、「間切人民ヲシテ公共事務ノ何物タルヲ知ラシメ、其公共的思想ヲ發達セシムヘキ唯一ノ手段ヲ失イ、従来ノ慣習中ニ存在スル良思想ヲ廢滅スル」<sup>51)</sup> ことになってしまうと訴えている。一木は制度の面からも経済の面からも、文子を維持すべきであるとしている。

仲原は久米島の自治制度を念頭において、明治維新と久米島の関係について考える。とくに琉球処分後の久米島の状況について、

新政府の支配になるにはなったが、元来沖縄の今度の変動は、一般人民に改革的機運があつて起つたことでないので、革新的の空気に乏しく、ここでも内地各地方より立ちおくれの気味があつた。村々の行政は相変わらず地頭代以下の旧役人が行ない、租税も土地制度も昔のままであつた。風俗習慣も昔の通りで、明治三十年頃までの男子供も結髪し、私も小学校一年で髪を切つた始末です。士族平民の階級的考えがなかなか抜けず、久米島などにはまた平民の間に奉公人・百姓と区別があり、なかなか厄介であつた<sup>52)</sup>。

と語っている。

琉球処分は明治政府によって、沖縄が日本国家のなかに強行的に組み込まれる一連の政治過程であつた。とくに1872（明治5）年の琉球藩の設置にはじまり、1879（明治12）年の沖縄県の設置を経て、翌年の分島問題の発生と終息に至る過程をさす<sup>53)</sup>。この過程で沖縄の諸制度の整備が遅れたのは、旧慣が残っていたためであるとされる。「間切と村では県よりもより以上に旧慣が尊重された。そのため間切と村の行政は、その監督と命令が琉球王府から沖縄県庁に移っただけで、ほとんど変化がなかった。久米島でも間切の蔵元や各村の村屋はそのまま存置され、地頭代以下の役人には改めて辞令を交付して従来からの地位が保証されたが、旧藩庁から派遣されていた下知役、検者、在番は廃止された」<sup>54)</sup> というものであつた。

#### 4 久米島オモロの研究

仲原のオモロ研究の出発点は、1943（昭和18）年の論文「かがり糸—おもろさうしの基本的研究第一集」（私家版）である。仲原にとって初めてのオモロに関する論文であつた。これ

は久米島オモロと首里オモロの関係について論述したものであり、『おもろさうし』は久米島の歴史をひも解く有力な手段として使われている。これをきっかけにして、仲原は戦後の1947（昭和22）年頃から本格的なオモロの研究成果を出していく<sup>55)</sup>。仲原のオモロ研究は、久米島を中心とする歴史社会的な研究が背景となっているので、その特徴は、その歴史方法論と、歴史社会的なオモロ研究にあった<sup>56)</sup>。

『おもろさうし』は、首里王府が統治下の島々に伝わる神歌を収録し編纂したものであり、琉球の歴史を知る上で、重要な資料となっている。さまざまな問題を抱えているとはいえ、琉球社会内部の姿を映し出している、初めての文字資料である。その名称の由来は、琉球の各地には「ウムイ」（思いが訛った）とよばれる神歌があったことに始まる。ヤマトでは室町期から江戸期にかけて冊子本を「草子」とよぶようになり、その動きを受けて、ウムイをヤマト風のオモロとよび換えて『おもろさうし』となったといわれている。

オモロの語源については、「日本文学の傍系としての琉球文学」（1927年）において伊波が説明したことが、基本的な解釈になっている。伊波は、

私は最初オモロは思ふといふ動詞から転じた語だと思つて、拙著『古琉球』にもさう書いて置いたが、それは甚しい誤りであつた。其後私はオモロの同義語にセルムといふのがあり、金石文にオモロの代りに、ミセ、ルといふ言葉が使つてあるのに気が付いて、オモロにはもと「形式化された神の言葉」の義があつたのではないかと疑つてゐたが、この頃それを確むべき材料をかなり探し出した。二百年前に編纂された『遺老説伝』や『琉球国中山王府官制』や『混効験集』には、オモロに神歌といふ漢字があてゝあるが、慶長八年に出来た僧袋中の『琉球神道記』第五卷には、これが御唄となつてゐて、オモリと片仮名が振つてある。オモロの外に、地方の神職なる祝女等が神前で謡ふ歌があつて、二百年前に編纂された『琉球国由来記』には、之にやはり御唄といふ漢字があてゝあるが、このオモリの大多数は祝女等がそらで覚えてゐたのを、今から三十年ほど前、琉球研究の先駆者田島利三郎氏によつて、百首ばかり採集されたのである。其後熱心な郷土研究者によつて十数首加へられたが、オモリにはオモロに似たものと、オモロの姉妹詩なるクワイニヤに似たのがあるから、公認された『おもろさうし』に対して、これは、『おもろ拾遺』とでも名づけたらいいかも知れぬ。それは兎に角、『神道記』によつて、三百年前に、オモロをオモリといつたといふことがわかつたが、私にはこのオモリといふ語がむしろオモロの古い形であるやうな気がしてならない<sup>57)</sup>。

と記している。

さらに続けて伊波は、久米島の資料に出てくる「おもろこわいにや」や『遺老説伝』第1巻の「於毛呂三比也志」などの例をあげて、「オモロ（オモリ）の場合には、オは敬語の御で、



モロ（モリ）が語根であることは、疑ふ余地がない。（中略）思ふに、「おもろみひやし」には、「おもろくわいにや」と等しく、「お<sup>モリ</sup>杜で謡ふ歌」即ち神前で謡ふ歌の義があつたのが、ウタといふ意の主体辞が落ちて、限定辞のオモリだけ遺つたものであらう。オモリ又はオモロに、神歌といふ漢字をあてたのは、決して偶然ではないと思ふ<sup>58)</sup>と説明する。オモロの語源の特定化には、久米島に残る資料が大きく寄与している。

『おもろさうし』は1531年（尚清王の時代）に、第1回目の結集事業が行なわれ、41首が収録された。これが第1巻となる。その後、82年後の1613年（尚寧王の時代、島津の侵攻の5年後）に第2回目の結集があり、46首が収録された第2巻が成立する。さらに10年後の1623年（尚豊王の時代）に第3巻以下の残りの20巻ができあがっている。こうした経緯をたどって『おもろさうし』は全22巻、総数1,554首の神歌から成る<sup>59)</sup>。

『おもろさうし』は三つの範疇から成る。すなわち第一は王府オモロである。これは国王と聞得大君をはじめ、首里王府の祭祀に従事する神女を讃えたオモロである。第二は地方オモロである。宮古、八重山諸島を除く沖縄の島々のオモロを収録している。これは「土地を賛美し、各地の豪族である按司を賛美したもの、地方の神女を謡ったものがその類型であり、大部分はオモロ時代初期および中期の古いもので、いわば農村のオモロである。首里王府の息のかからない、沖縄古代の世界観、宗教観を知るのに、地方オモロは欠かせないもの<sup>60)</sup>」となっている。第三は特殊オモロである。船乗りの労働歌や、「あすび（遊び）」とよばれる親善での歌舞饗宴の歌などを収録している。久米島に関するオモロは、ほとんど地方オモロの範疇に属し、『おもろさうし』の11巻と21巻に収録されている。そのなかには特殊オモロに分類されるものもある。

『おもろさうし』には「やまと」という言葉が多く用いられている。『おもろさうし』の歌からヤマトとの関係について、琉球の各地域で違っていることがわかる<sup>61)</sup>。10巻の摩文仁のオモロでは、ヤマトとの交易、15巻の浦襲（浦添）・16巻の勝連・17巻の名護のオモロでは、ヤマトへの憧憬の念がうたわれている。これに対して3巻の聞得大君のオモロは、ヤマトとの敵対関係をうたっている。14巻の今帰仁・20巻の兼城間切のオモロでも、同様に敵対関係をうたっている。そのなかで久米島のオモロは、ヤマトと際立って協調的で密接な関係を保っていることをうたっている。ヤマトからの交易者や、久米島からヤマトへ出かけた交易者のことがうたわれている。久米島がヤマトと友好的な関係にあったことがわかる。

仲原は1947（昭和22）年に「セヂ（霊力）の信仰について」を発表した後、数年間はオモロの評釈に専念している。『沖縄文化』誌に約5年間にわたって連載された「おもろ評釈」は、主にオモロ発生の基盤である社会構造と、その発展過程を解明したものである。オモロの原本を重視し、実証研究が着実に行なわれている。1957（昭和32）年に仲原は著書『おもろ新釈』を発表するが、これは「おもろ評釈」と題して発表した論文を中心にまとめたものである<sup>62)</sup>。内容は140首のオモロ解釈が中心であるが、オモロ研究の体系的論述となっている。

仲原は著書『おもろ新釈』において、オモロの語義に触れて、

おもろは、ウムの表記であることは前にふれた。ウムは、もともとウムイといったらしく、現在でも、地方の神女たちの謡うのはウムイとっている。ウムイは「思ひ」の転訛である。即ち胸の中の思ひ（オモイ）を美辞麗句をつらねて韻律的に表現したものの意であろう<sup>63)</sup>。

と述べている。外間は仲原とほぼ同じ考え方を示して、仲原との共著『おもろさうし辞典・総索引』の「おもろ」の項目で、「ウムイは「思ひ」の転訛で、胸中の思い（オモイ）を美辞を連ねて韻律的に表現したものの意であろう。ただし、「胸中の思い」という「思い」の意味は、内側に向けられる内的思考ではなく、外に対する「宣る」であり、「唱える」であると考えられる<sup>64)</sup>と記している。

さらに仲原は1950（昭和25）年の「おもろのふし名出所索引」において、『おもろさうし』のオモロに付されているふし名は、オモロの題名ではなく、謡う時の謡い方（ふし）であることを指摘している。仲原は伊波のオモロ解釈を忠実にたどりながら、伊波とは異なる視点から研究を行ない、体系的な把握と独創的な評釈をしている。これによって仲原はオモロ研究者として注目されるようになる。仲原は『おもろさうし』の校本、辞典、索引の三つをつくることをライフワークとしていた。しかし仲原は完成する前に亡くなり、外間によって、その完成をみることになる。仲原は『おもろさうし』に抒情を見出していると同時に、そのオモロを生んだ人びとと、その時代背景に視点を据えていた。

仲原は1950（昭和25）年の「おもろの研究—おもろ研究の方向と再出発」<sup>65)</sup>において、オモロ研究の体系的な方法論を明らかにして、研究法の新たな道を示している。この論文において、

オモロは後世の短歌のような個人的制作はなく、末期の神歌をのぞけば、すべて社会的産物であるから、多少に拘らず、その社会関係を反映する筈である。（中略）このような見地から、その特徴に依り、これを類別すれば、おおよそ三つの型にまとめることが出来る。即ち（1）按司（武力的支配者）発生以前のもの、（2）按司時代のもの、（3）王国成立以後のもの、以上の三つの型に類別することが出来る。（中略）オモロの歌詞の型およびその内容から、（中略）（1）按司発生前の古代民謡（2）按司時代の民謡風な歌謡（3）王国成立後の神歌と大体このような類型になっている<sup>66)</sup>。

と記している。オモロ発生の背景となる時代と、オモロの歌詞や内容の分類は、前述の経済的発展段階説に依拠して、部落時代・按司時代・王国時代となる。この時代区分は、それまで王

統別の区分しかしてこなかった沖縄史において、新たな時代区分の指標を提示する。

## 5 戦後沖縄と歴史研究

戦後沖縄における仲原の歴史研究には、大きな特徴が4点ある。すなわち、(1) 沖縄の歴史区分、(2) 琉球と薩摩藩、(3) ペリー来航と米軍、(4) ブラジル「勝ち組」への対応についてである。

### (1) 沖縄の時代区分

仲原は1950年代にオモロ研究を進める一方、歴史研究に傾倒していく。1952(昭和27)年には「沖縄現代政治史」や「沖縄現代産業・経済史」<sup>67)</sup>などの論文を発表している。さらに沖縄における中学校用教科書『琉球の歴史(上)(下)』(文教図書出版、1952年、1953年)<sup>68)</sup>を刊行している。これは占領下の沖縄で使用するための社会科教科書となる。

『琉球の歴史』において仲原は、それまで沖縄の歴史書がとっていた『中山世鑑』の流れをくむ古い史観を一掃する。すなわち『世譜』、『球陽』、『一千年史』とたどった一連の支配者の歴史、なかでも神話伝説を一掃している<sup>69)</sup>。そして時代分類については、1原始社会(漁獵時代)、2古代社会(部落時代)、3封建社会前期(按司時代・三山分立時代)、4封建時代後期(王朝時代～第一尚氏・第二尚氏)、5近代社会(沖縄県時代)と区分して、それまでの歴史書にはなかった斬新なものを示した。仲原によって沖縄の歴史は、世界史や日本史で使用されていた原始・古代・封建・近代という時代区分にしたがって分けられ、他の歴史との比較基準を得た<sup>70)</sup>。これによって沖縄史を自己完結的に展開するものとしてでなく、ひろく日本史と世界的視野から把握しようとした<sup>71)</sup>。

そして仲原は1957(昭和32)年に刊行した『おもろ新釈』で、この歴史区分を部分的に補充している。すなわち1原始社会(漁獵時代3・4世紀迄)、2古代社会(農業部落時代3・4世紀～12世紀末)、3封建社会前期(按司時代・三山対立時代12世紀～15世紀)、4封建時代後期(第一尚王国・第二尚王国15世紀～19世紀)、5近代社会(19世紀～現代)としている。これは現代に至るまで、沖縄と日本の時代を対照する基準として使用されている(図-1)。しかしながらこの時代区分は比較基準を得たということにすぎないので、沖縄のそれぞれの時代が、たとえば封建や近代の特徴をもっているのかどうか明らかになったというわけではない。

### (2) 琉球と薩摩藩

1609年の薩摩藩の琉球進攻について、仲原は「進入」という用語を使っている。仲原は琉球の歴史の歩みが、原始・古代社会をひきずり、歴史的後進性から脱却することができなかつ

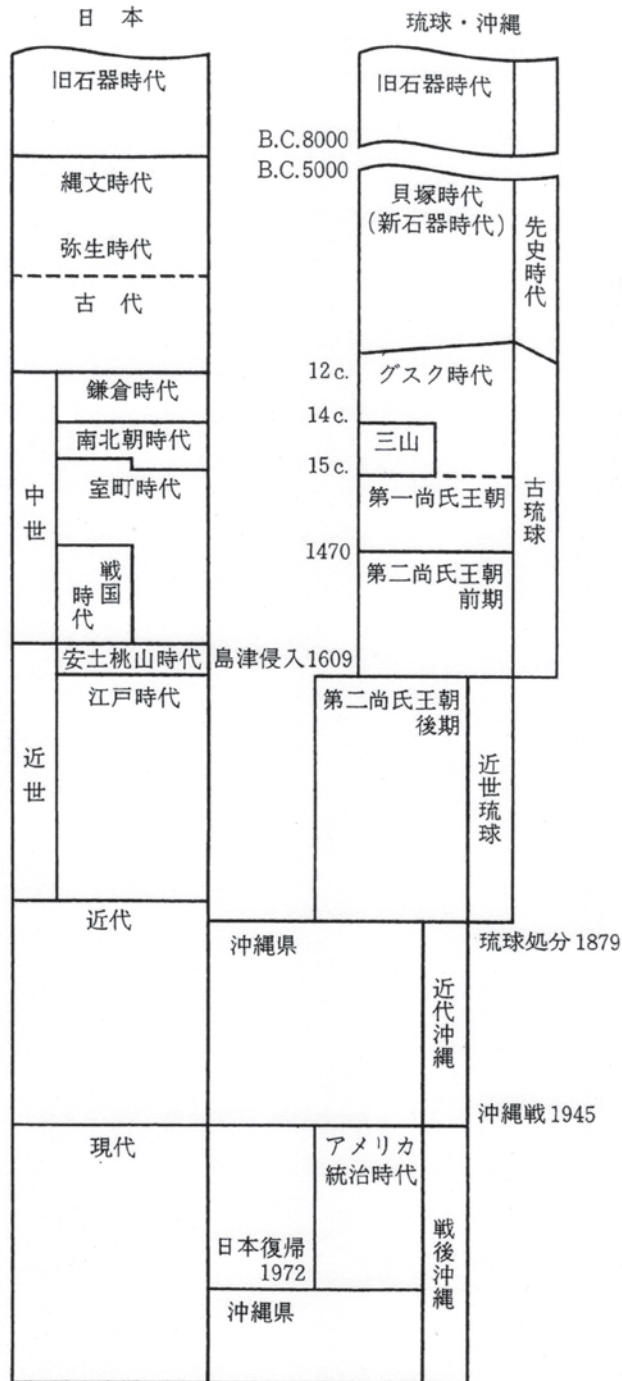


図 1 琉球・沖縄および日本の時代対照

資料：高良倉吉『琉球王国』，岩波新書，1993年，40ページ

たと考えている。そして薩摩藩の琉球進攻によって、日本の幕藩体制という進んだ封建社会的諸制度が沖縄に入ってきたとしている。薩摩藩による経済的搾取を認めているが、その進入は歴史的な刺激になり、エネルギーになったと考えている。仲原は近代主義的な歴史評価という立場をとり、明治以降の「沖縄の近代化」も好ましい傾向ととらえている。もちろん、これはとくに若い研究者から激しい批判にさらされることになる。しかし仲原は進入という用語を譲らず、それは沖縄の歴史的脱皮であるという見方を変えることはなかった。

仲原は、

慶長の島津進入という事実は、現象的には島津家の出兵であるが、地理的条件にはばまれ、しばらく停止していた統一の意欲の再発動と見られる。このように、進入者、被進入者の立場を克服し、高い次元から、この史実を把握した時、琉球列島も、この事件を契機として、歴史的に一步前進したことを理解することが出来た、といえよう。薩琉関係を視る角度を改めなければ、近世史の進行に即した展望は不可能であろう<sup>72)</sup>。

と主張する。さらに、

この事件も、近世日本誕生のための全国統一運動の余波であった。島津自体が、すでに秀吉に降服し、関ヶ原敗戦には家康に拝跪し、脱皮をかさねて、再生したのである。この事件を契機として琉球列島も始めて中世的、孤立的、封鎖的位置を脱却し、近世的世界へ一步前進する。多くの郷土史家は、単に郷土的というよりは、尚家的立場から、この事件を理解しようとするから、歴史の進行過程の意義を看過する。前にふれたように、より高度の次元から事件の意義を認識し、再評価すべきであろう<sup>73)</sup>。

と説明している。

仲原は未定稿「島津進入の歴史的意義と評価」によって、薩摩藩の琉球進攻を「幕藩体制の地方的波及である」という見解を示している<sup>74)</sup>。薩摩藩の行動を好意的にとらえているとはいえ、仲原は支配-被支配の関係を無批判に受け入れているわけではない。また沖縄に関して経済的発展段階説に基づく近代化論を単にあてはめているわけでもない。前述のように仲原は、久米島の歴史分析から歴史研究を始めている。そこでは支配者が替わっても、それを天命として受け入れる「革命」に匹敵することが起こっていた。この意味で仲原は薩摩藩の琉球進攻も、天命として受け入れるべき一種の革命と考えていたといえる。

薩摩藩の支配に関する仲原の考えは、元県知事の大田昌秀(1925-、以下は大田)による論文「明治時代の沖縄における言論の自由」(1964年)に対する仲原の感想にも示されている。仲原は大田に対して、

明治以前の法については、論文の性質上かんたんにするのは当然ですが、少しお手軽のかんじです。サツマから指令された掟十五条などは、大部分は人民保護のため支配階級の専横を規制したもので、百姓から従来以上の税をとってはいけないという条項など、支配階級には不都合ですが、彼らに支配されていた百姓には有難い規制です。おしつけられた規定かどうかは別として、内容は一概に排斥すべきものではない<sup>75)</sup>。

と述べている。

伊波・東恩納・真境名らの琉球史は「廃藩置県は一種の奴隷解放なり」という視点が強かったが、仲原は他の視点から考えてみようとする<sup>76)</sup>。仲原によれば、直前の時代の影響を強く受けているので、薩琉関係にしても圧迫支配ということにこだわりすぎている。仲原は薩琉関係を再考する必要があると語り、その意図は仲原の論文「砂糖の来歴」<sup>77)</sup>に著されている。仲原は薩摩側の史料について、総じて分析が進んでいないために、薩琉関係の見方に偏りが生じていると考えていたようである<sup>78)</sup>。

薩琉関係を明らかにするには、琉球の経済構造も明らかにする必要がある。仲原の遺稿は「砂糖の来歴」補遺<sup>79)</sup>であった。また没後の机上には、琉球の重要な経済史料である『琉球館文書』という文献資料があったとされる。死去の直前まで、砂糖をはじめとして、琉球史の基層にある経済構造を明らかにしようとしたようである。戦後の仲原による沖縄歴史の研究は、一貫して社会を支える経済の問題に目が向けられているといえる。

### (3) ベリー来航と米軍

仲原は戦後の1955(昭和30)年に、幕末のペリーの沖縄来訪に強い関心をもち「ペリー提督の手紙」<sup>80)</sup>という論考を残している。ペリー(Matthew Calbraith Perry, 1794-1858)の来訪に関心をもったのは、沖縄を占領したアメリカ軍の意向によって作成されたジョージ・カー(George H. Kerr, 1911-1992)の『琉球の歴史』が関係している<sup>81)</sup>。仲原は、

スタンフォード大学教授G・H・カー氏の労作「琉球の歴史」の中から、ペリーの意図および行動に関する部分を抜き出して、私はこの小論を構成する。結論を先にいうと、ペリーは、沖縄を占領する意志をもってしたが、時の政府に斥けられて、すごすごと帰っていったというのである。未刊の本だから批評はさし控えるが、この本の構造をちょっと書いておくのが便利だろうと思う。同氏の琉球史は、与那国善三氏の沖縄歴史年表(金城増太郎氏原著を補修)を土台にすえ、その上に真境名氏の「沖縄一千年史」(旧版)と太田朝敷氏の「沖縄県政五十年」を配置し(いずれもホンヤク)したものであると、自ら断っている。それを比嘉春潮さんが、点検して事実の誤を正し、それとは別に東恩納寛惇さんと私が、見解の不審な点を指摘して修正を求め、著者はこれを参考にして、修補をほどこ

したものである。その外に著者は、英・米・仏等の文献を渉獵して、血肉をつけた。本書は吾々から見ると、沖縄の部分は必ずしも満足すべきものではない。しかし外国文献による見解の披瀝ということは誤謬も認められるが、良かれ悪しかれ、本書の特色といえよう<sup>82)</sup>。

と語っている。

仲原は『琉球の歴史』の作成に関わっていた。しかし同書の見解に必ずしも満足していない。その上でペリーの書簡について、「私がこの原稿をとくに興味深く、一種の畏敬をもって読んだのは、ペリーの行動を述べるにあたって、現下の政治状況に煩わされることなく、淡々と客観的に叙述の筆を進め「立派な史家」たるの風格を厳然と保持していることである」<sup>83)</sup>としている。仲原はペリー書簡を通して、自らの考えを語る。

仲原の主張をみる前に、ペリー来航の時間的な経過をたどっておく。1852年11月、ペリーはミシシッピ号で本国を出帆、喜望峯廻りでシンガポールを経由し、翌年4月に香港に入港する。ここで先着していた3艦船と合流して、上海から戻って来たサスケハンナ号を旗艦として移乗し、5月に那覇に寄港し、小笠原諸島に入り、貯炭所候補地を調査した上で那覇に戻り、江戸湾に向けて出発する。6月に4隻は江戸湾に入る。示威行動の結果、大統領国書の受領を幕府に認めさせて、江戸湾から退去する。その後、那覇において琉球王国に貯炭所建設を許可するよう要求し、清国に引き揚げた。

1854年1月に再び、清国を發したペリー艦隊は那覇に寄港し、2月に7艦船が江戸湾に入る。その後、2艦船が合流し、9艦船で米日交渉に入る。日米和親条約の締結後、6月に下田を出港して、那覇に寄港する。この際に琉球王国に対して、物品の相対売買、薪水供与、難破船救助などを約した米琉修好条約を認めさせている<sup>84)</sup>。

琉球の所属問題について、『ペルリ提督日本遠征記』によれば、ペリーは「琉球がどの国に属するかは今尚議論のある問題である。或る人によれば、それは日本の薩摩侯の属領と云はれ、他の人々は支那に属すると想像してゐる。けれども琉球は絶対的に日本に属してゐる属領であると云ふ方が多かれ少かれ確からしく、支那に対しても貢物を送つてゐることに疑がないのだから、多分幾らかは同国にも従属してゐるのであろう。言語、習慣、法律、服装、道徳、風習及び通商関係等すべてはこの見解を確証するものである」<sup>85)</sup>と考えている。

ペリーは「日琉同祖論」を主張しながら、それが琉球の日本所属の証明になるとは考えなかった。日本と中国の両属論の見解に立って、琉球の住民がいかなる人種的・民族的特徴を有していても、住民の性格と国境線の策定とは無関係なものとみなしていた。この見解は『万国公法』の国境原理においても、同様のことがいえる<sup>86)</sup>。

仲原はペリーが書簡のなかで、

主として、自分の職責でやったこと、即ち琉球の美しき島々の人民および政府の上に確立した影響力を、断乎として継続することを合衆国の政策として実施することを依託せられんことを切望するものである<sup>87)</sup>。

としている点に注目する。仲原はこの書簡から、ペリーが琉球人を、ヤマトの隷属と圧政から解放したというシナリオにしたいと願っていると考える。しかしながら仲原はこのシナリオに疑問を投げかける。

仲原は19世紀半ばのアメリカのもっていた二重性ないし二面性を考える。ひとつの側面は、当時のアメリカ人は圧政の下におかれた人びとが解放されるべきであるという信念をもっているという点である。ペリーはこの点から琉球をみている。仲原は、

当時の日本は、徳川幕府を頂点とする幕藩体制の時代で、ペリーの調査班は琉球国の実態を、かなりの確に把握したと見られる。琉球の農民は、日本（薩摩）と琉球自体の支配機構のためにおしつぶされ、氣息えんえんとしている。彼等の眼に映じた琉球の人民が、奴隷と大差なき状態にあると考えたのは無理でない<sup>88)</sup>。

と語る。ペリーは琉球の住民が奴隷と大差のない状態であったという認識をもっていると考え

る。しかし仲原はペリーの琉球占領計画が、奴隷解放という善意から出たものではないとする。アメリカの帝国主義的な行動に基づいているという、もうひとつの側面である。アメリカは中国進出の手がかりとして、琉球占領を計画していた。仲原は、

合衆国政府が活を入れたなら、この美しい（と彼等が見た）島々の可憐な住民は息を吹き返すにちがいないと考えたのは、皮相の観察とは言えない。ただ、それが永遠に住民の幸福となるかどうか。それはペリーが神の道を宣べる牧師ではなく、国家の利益を代表する軍人であることを思い出せば、彼の考え方の限界がはっきりわかるわけである。ペリーは琉球政府に問題を提出したままにして、浦賀に乗り込み、開港を促す大統領の国書を手交し、那覇に引き返し、宿舎・貯炭所の問題を解決し、支那に向って引き返した。彼はすでに琉球を実質的に支配していると考えていた<sup>89)</sup>。

と説明する。

このアメリカの二重性ないし二面性は、アメリカの国内政治に関係している。ペリーはホイッグ党政権によって、極東への派遣命令を受けた。しかし1853年の大統領選挙で、民主党のピアース（Franklin Pierce, 1804-1869）が大統領に当選した。したがって1854年3月には



政権が、ホイッグ党（1860年以降、共和党）から民主党に交代している。政権交代によって政策が大きく転換して、ペリーとアメリカ政府の関係は微妙となる。1854年にペリーは二通目の書簡を香港からワシントンに送っている。

その内容について仲原は、

一ヵ月後の一八五四年一月十五日ペリーは更に那覇から手紙を送り、琉球占領の許可を改めて要請している。…私（引用者注：ペリー）の意図は、日本政府が条約の交渉または米国旗をかけた捕鯨船および商館をおく港を指定することを拒むなら、米国民の上に加えられた侮辱および損害に対する抗議という根拠に立って、日本の属国たる琉球を控え目ながら保有し、政府がこれを是認するか否かを待つことである。それまでは、自分一人の責任であり、自分はまたそれを、政治的保険と見なすものである。何となれば、自分が江戸に向かって（那覇を）出発する前に第一歩をふみ出しておかなければ、ロシアまたはフランス、あるいはおそらく、イギリスが機先を制するであろうからといっている<sup>90</sup>。

と語る。

ペリーは二つの書簡をアメリカ政府に送っているが、仲原は二つの書簡における琉球占領の理由付けの違いに注目する。仲原は、

一信では事実上すでに占領しているようなことを述べ、それを公式に認める指令をえたいと言っている。ところが、一ヵ月後の第二信にはもしも日本が、米国の要求をきかない場合、その抗議として占領したいと主張<sup>91</sup>。

していると、その違いを説明する。第一の書簡では、日本の支配による隷属から琉球を解放することが、占領の目的であった。ところが第二の書簡では、この解放とはまったく逆ともいえる帝国主義的な論理が提示される。琉球がロシア・フランス・イギリスの植民地になる前に、アメリカの植民地にしようというのである。

このペリーの書簡に対するアメリカ政府の返信が来ないうちに、日米親善条約は成立し、ペリーの琉球占領の口実はなくなってしまう。仲原は続けて「AがいなかったらBが入りこむという。今時の真空論議と似たことをいっている」と指摘する。戦後の東西冷戦のなかで、沖縄の施政権がアメリカによって握られているのは、アメリカ軍が去って真空状態が生じれば、中国やソ連が入ってくるという理由付けがなされていた。仲原はこれが単なる口実にすぎないことを指摘し、ペリーの時と同様に、アメリカの帝国主義が沖縄の統治を決定し、沖縄は特殊な統治形態のもとに置かれていると示唆している。

さらにペリーのもとに届いたアメリカ政府（民主党政権）の返信は、

貴君の琉球諸島の一つを保有しようという提案は、厄介な問題である。大統領は、この島を保有しようとの提案の愛国的動機は高く評価するが、議会の承認もなく、遠隔の島を保有することは、現在よりも、もっと重大な理由がなければ好ましいことではない。もし将来、反抗（レジスタンス）を受けておびやかされ、撤退することにでもなれば、むしろ恥辱である。また、一旦占領すれば、それを維持する兵力のため巨額の費用を要する。…大統領は、貴官の提案を許可しないことに決定した<sup>92)</sup>。

というものであった。

アメリカ政府の意向は、コストパフォーマンスを考えると、リスクが大きいため琉球占領を断念するというものであった。ここには琉球を日本の圧政から解放するという発想はまったくない。ペリーは帝国主義的な考え方で、外交交渉にあたっていたが、アメリカの民主党政権は、ホイッグ党に比して、対外膨張に対して慎重であった。

実際にはペリーがアメリカを出発した時点では、アメリカ政府（ホイッグ党政権）は琉球占領の可能性について、検討していなかった。しかしペリー艦隊の航海中に、日本が開国を認めない場合には、小笠原と琉球の占領を認めるという訓令を、ペリーに対して与えている。そのなかで「但し琉球占領の場合断じて、代金を支払わずして、供給品を取るべからず、自己を防禦する以外に武力を使用すべからず」<sup>93)</sup>と注意を与えている。つまり日本の辺境を占領するという圧力を加えることによって、幕府に開国を迫るというものであり、日本の開国が目的であって、小笠原と琉球の占領をめざしているわけではなかった。

ところでペリーに対する琉球と幕府の対応である。武力をもたない琉球としては、平和的交渉に頼る以外方法はない。交渉にあたった琉球の通事について、『ペリリ提督日本遠征記』は「執政の通訳はイチラヂチ（板良敷）といふ若い琉球人であつた。彼は三年間北京に滞在して教育をうけたのであつた。少し英語も話すことはできたが、会話は支那語で行はれた。この青年は合衆国の歴史と地理とについても幾らか知つてゐた。彼はワシントンの性格と行為とをよく知つてゐて『非常に偉大な役人』であると云つてゐた」<sup>94)</sup>という。ペリーの通訳官ウィリアムズ（Samuel Wells Williams, 1812-1884）も板良敷について、「板良敷は、これから（琉球に）来航する艦隊所属の艦船、当地に逗留予定の艦船、また来年来航する艦隊兵力など、われわれの動向をすべて把握しようと、まったく異状なまでに質問を浴びせてきた。（中略）これらの質問から、彼に贈ったアメリカ合衆国史を彼が読んでいると判断されたので、なお二、三名前を質問して、来年はアメリカへ渡ったうえ、自分の目で確かめてくることだと彼に話した。彼は、航海が長いからと口をにごしてはいたが、この着想が彼にとって不愉快であらうはずはない」<sup>95)</sup>と記している。

板良敷は中国語と英語の知識を活用し、交渉相手と渡り合った。ペリーとの交渉において、アメリカの要求に対して、琉球側は率直な回答を与えないようにするため、無数の複雑な議論

を用意するなど、虚々実々の駆け引きを行なった。知恵をふりしぼり、苦肉の外交戦術を駆使した琉球側に対して、アメリカ側は意外と手強い交渉相手であると感じた。そこでアメリカは琉球側との交渉に際して、強硬な姿勢で臨むことになる<sup>96)</sup>。

一方、幕府はペリーとの交渉で琉球に関して、どのように回答するべきか、その想定問答を準備していた。それは次のようなものである。

(問) 琉球は「日本之属国」か、あるいは「清国之属国」であるか。(答) 以前、アメリカが松前・浦賀・琉球の三ヶ所に石炭貯蔵庫を設けたいと日本側に申し出たことからみても、琉球を日本の属国と理解していることは明らかであろう。何故にそのような質問をするのか。(問) 琉球は大体のところ日本の属国と思ひ、以前はそのように申し上げたが、どこの属国であるか明確には承知していないので、改めてお尋ねしたい。(答) 日本に属し、薩摩藩主の所領であることにまちがいない。(問) 琉球国は清国の正朔(年号)を用い、国王代替わりには冊封使が渡来し、進貢船を派遣するなど、清国の属国であると聞いているが、いかがであるか。(答) 日本の慶長年間に琉球を支配下におさめたが、中国との冊封関係の存続については容認してきた。しかし、琉球は日本にまったく服従している<sup>97)</sup>。

ということを想定していた。このように幕府は琉球の支配権を主張し、その一方で琉球と中国との冊封関係の存続についても容認していた。幕府は国際的には理解され難い考え方を示したといえる。

仲原はアメリカ政府やペリーの姿勢と、1955(昭和30)年当時の状況と重ね合わせる<sup>98)</sup>。仲原は、

先般の朝鮮事変において、冒険的戦線拡大を主張するマ元帥をあっさり罷免したり—これも民主党政府一百年の年月はへだてても、デモクラシーの政治が健全に運用されていれば、国民が一二の英雄的人物に引きずられることはありえないということを知り得る。(中略) 日本および琉球におけるペリーの果敢な活動が、因循姑息な島国の官民をふるえあがらせ、彼は完全に使命を果すことが出来た。しかし琉球占領に傾いた彼の個人的野心は、多数国民を代表する大統領によって見事に圧殺された。東洋流に考えると、凱旋將軍の後姿は誠に寂しいものであったと思われるが、事実はどうであったか。それはそれとして、日本では開港の反作用も手伝い、封建体制はくずれ、その中から若々しい近代国家が生れた。その新国家の手によって、琉球の封建王国は解体され、その人民は新国家と融合した。ペリーの意志如何にかかわらず、彼の活動が、近代日本形成の契機となったことは否むべからざる事実である<sup>99)</sup>。

と語っている。

仲原はペリー来航と「島津進入」の琉球への影響を、いずれも旧来の体制を解体させたものとして評価している。そしてペリーの行動とマッカーサー (Douglas MacArthur, 1880-1964) の行動を重ね合わせている。たとえこの間が百年の年月を隔てていたとしても、デモクラシーの政治が健全に運用されていれば、英雄的な人物に引きずられることはない。そして仲原は東西冷戦のなかで、アメリカの沖縄占領政策がデモクラシーの理想からかけ離れたものであることに気付いている。

この冷戦について仲原は、

われわれのすんでいる日本はどうか。全世界的規模において展開せられている、いわゆる冷戦の「場」となり、時にけいれん的の社会的緊張がおこりつつある。第一次戦争においては、全く経験せられなかった『原子爆弾』による戦争の恐怖が、人々の頭をかすめる。原子爆弾の残忍な破壊力は、すでに日本人を対象として経験済みである。しかも、原子爆弾より更に強力な水素爆弾というものさえ発明されていると、新聞はほこらしげに宣伝する。日本という土地もマッカーサーが夢想したスイスは、今は昔話となっている。トインビーは人類の歴史の実証的研究によって、現代という時代は、まさに西欧文明—そこには先鋭に対立する二つの階級があり、一方においてはまたこれに因由する戦争の危機がせまりつつある—が終末に近づいていることを警告する<sup>100)</sup>。

と語っている。

仲原はこのような危機的な状況におかれてしていると警告する一方、アメリカの基本原則であるデモクラシーに期待をかける。そして仲原は1955(昭和30)年という沖縄の施政権の返還を考えもしなかった時期に、アメリカ国民が日本に対して「平和的善意」をもてば、沖縄に対するアメリカの政策も変化するであろうと考える。仲原はペリーの来航が沖縄の歴史にもたらした意義から、今後の沖縄のあり方を考える。仲原は、

沖縄の歴史を一きわめて小さい世界であるが一見る時も科学的に見ようと志向するならば、きわめて、冷静に没主観的に、これに立ち向う必要がある。自分の心中に支配者あるいは被支配者の意識をもつことも、都会人的、または地方人的主観のかけをのこすことも、歴史の観照には何の益もないばかりか非常な障害になる<sup>101)</sup>。

と語る。仲原が沖縄の歴史研究を通じて得たのは、その歴史的評価の是非はともかくとして、広い視野に立って、冷静に没主観的に歴史をみる視点であった<sup>102)</sup>。

戦後の仲原の歴史研究において特筆すべきことは、アメリカによる沖縄の統治に関する姿勢

を明らかにした点である。仲原は広い視点に立って、アメリカの世界戦略のなかで、沖縄をどのように位置付けるかを考えている。仲原は戦後のアメリカの世界戦略をくわしく考察しているわけではないが、こういった視点が必要であることを、ペリーの来航を引き合いに出して指摘している。

#### (4) ブラジル「勝ち組」への対応

戦後、仲原を悩ませた問題があった。ブラジルに移住した一部の沖縄人の間で、日本の敗戦を信じていない「勝ち組」と、日本が敗北したとする「負け組」に分かれ、現地の沖縄人社会が分裂している問題であった<sup>103)</sup>。ブラジルに日本の敗戦を信じない沖縄出身者がいることに驚いた仲原は、1947（昭和22）年に沖縄連盟総本部会長名で、「ブラジル在留の沖縄出身の皆様へ告ぐ」<sup>104)</sup>という文書を送っている。

勝ち組という現象には、遠隔地ナショナリズム（本国から離れた移民が、本国民よりも強力な民族感情をもつこと）の要素がある。しかも興味深いことに、この勝ち組には沖縄出身者が多かった。軍国主義教育に原因があるとしても、軍国主義は日本全体に行き渡っているので、沖縄出身者の多さは説明できない。沖縄は幕藩体制においては異国のような扱いを受け、近代日本になって国家への統合が遅れたという脈絡をとった。そのために沖縄人は内地人に比べて、アイデンティティーの揺れが激しかった。複雑な脈絡をたどったアイデンティティーは、日本の敗戦という情報に刺激されて、平均的日本人よりも大日本帝国に忠誠を誓う反応が増幅されて、過激に噴出したと考えられる<sup>105)</sup>。

仲原は前述のブラジルに送付した文書において、1931（昭和6）年の満州事変頃からの状況を説明することから始めている。仲原は、

日本は昭和六年頃から反動的な日本主義が流行し「日本は神国なり」とか「神州不滅の国」とか誇称し、軍国主義者や世界の大勢や日本の実力を過大に信じていた軍人官僚にひきずられ、昭和六年に日華事変を引起し、米英其他の国の平和主義に乘じ思い上った彼等は遂に第二次世界大戦という泥沼に足を踏み入れたのであります。（中略）対米英戦争が一部軍国主義者の圧力によったもので、必ず日本の敗戦で終るであろう事は、始めから識者の認めていたところで、国民の大部分はただ夢中で彼等にひきずられていた<sup>106)</sup>。

と記している。戦争は一部軍国主義者の圧力によるもので、国民はそれに引きずられたに過ぎないとしている。これによって多数の日本国民が、戦争責任から免罪されていることを示唆している。もちろん沖縄でも戦争責任が問われることはない。

沖縄初の芥川賞作家である大城立裕（1925-、以下は大城）は、沖縄で戦争責任が厳しく追及されない背景には、沖縄共同体の意識があると指摘している。つまり沖縄全体が被害者であ

るという考え方である。大城は「米軍が日本兵を「ジャパニーズ」とよんで、沖縄住民と区別したことに容易に乗っかるだけの意識を、住民は持ちあわせていた。そこへ、疑似独立国琉球の体制を確立する仕事を、進めなければならなかった。技術的には、戦争責任などを論じていては、能力ある人を活用できない、ということがあった。(中略)これから沖縄共同体を再建していくのだ、という意志に全住民を統一するのは、わけはなかった。そこでは、かつて大政翼賛会に働いた人物も、軍国主義教育に狂奔した教師も、すべてがひとしく沖縄人として日本軍国主義の犠牲者である、という認識が一般に通用した」<sup>107)</sup>と、沖縄の意識を説明している。

また戦後に沖縄に誕生した政党のなかには、沖縄の独立を主張する政党があった<sup>108)</sup>。その独立を主張するリーダーが、戦時中は軍国主義を鼓舞した中心人物であった。それが戦後になって政治的立場をまったく変えて、親米的な態度を装い、アメリカの庇護の下で独立しようと吹聴した。その政治姿勢や人柄は信用されなかった。戦前に軍国主義教育を受けた世代が、一言の反省もないままに政治的立場を急変したからである。もちろん当時の独立論などは、このために本気で相手にされなかった。しかし裏を返せば、政治的立場を急変させて、全く逆のことを言い出したとしても、その人たちも結局、戦争の犠牲者なのであるという認識は底流にあった。

仲原はブラジルに送付した文書で続けて、戦後の沖縄が、米軍の施政権下に置かれていることを説明する。そして内地では「沖縄連盟」を組織して、沖縄への引上げ事業に着手していることを紹介する。最後に、ブラジルの沖縄出身者に対して、日本の敗戦への認識を前提にして、沖縄に対する精神的声援と物質的援助を与えてくれるように訴えている。民族という意識には至っていないが、日本の一地域への帰属意識というよりも、郷土としての沖縄共同体という意識が強くみられる文書である。

さらに仲原は1947(昭和22)年12月にも、「ブラジル在留の沖縄出身の皆様へ告ぐ」<sup>109)</sup>という文書を送っている。そのなかで、

どうぞ私達の個人生活には御心配なく、焦土と化した沖縄を、米軍の期待に副うて、一日も早く復帰し、嘗ての南海の楽園であった沖縄の再現に、絶大な御後援を賜わらんことを、偏にお願いいたしておきます<sup>110)</sup>。

と記している。沖縄に対する支援に特化してほしいと、ブラジル在住の沖縄出身者によびかけている。戦争の結果、沖縄は米軍の管轄下におかれ、主権の所在もあいまいになっている。沖縄の現状をみて、仲原にはかつての同化主義とは異なる意識が芽生えている。しかしこれは沖縄共同体という意識に支えられた「沖縄独立」という方向とはいえないものである<sup>111)</sup>。

仲原は1947(昭和22)年に「沖縄人と封建性」と題する論考を発表して、沖縄の封建性を振りかえる。そのなかで、

元来が交通不便な島々から成って居り、各部落、各島それぞれ独得の言葉、風俗習慣を持ち血縁的、地縁的感情が強く、おくれた社会に共通な現象であるが、部落間の協力、互譲というよりは競争、反発の気風が強く、尊敬、親和の精神よりも軽侮、憎悪の傾向が激しかったことは否定することは出来ない。(中略)四世紀の長年月の間、このような不合理な枠内にとじ込められ、一方に於て島津の拘束、久米村人に依って精力的に宣布せられた封建倫理—儒教道徳—の浸透あり、沖縄人は一般日本人以上に封建的性状を沁み込まされたのである。日本に於ける都会人田舎人間の理由のない軽侮と憎悪、地域的血族的団結と反発、これに類する没理性的な感情の濃厚さは、民族的特徴とさえ見られるが、沖縄に於ては更に甚だしいものが感ぜられる<sup>112)</sup>。

と語っている。

沖縄には地理的に島および集落による帰属意識の違いがある。さらに都市と農村の対立感情がある。そこに首里王府が支配階層に煩雑な階級制度を設けたことによって、複雑な体制ができあがった。この体制を打ち壊さないかぎり、沖縄には人間尊重の思想は定着しない。そして「自由といい、平等といい、その政治的欲求としての民主主義への運動も、その根底に横たわる人間の尊重、人格の尊厳を無視するならば、単なる猿まねに過ぎない」<sup>113)</sup>とする。人間尊重の思想が定着しなければ、自由や民主主義の実効性も担保されない。「吾々沖縄人は(中略)封建的習性にむしばまれていることが極めて深く、思想上は兎に角として言語、服飾にまで及び、所謂病こうもうに至っていることを反省したい」としている。

そして仲原は封建性を克服して、構築すべき社会について語る。

故郷を愛し同郷人相親しむことは、人間の美風である。而しながらこの美風は、ややもすれば排他的独善的性向への温床となる危険がある。破壊された郷土を再建すべく全沖縄人の協力が望ましいが、その前に先ず吾々は好ましい世界市民の型に、自分を鍛え直すことが必要である。然らざれば又々旧態依然たる沖縄が再現せられるであろう。今度の戦争の深刻な経験にかんがみ、永遠の平和を目指して国際連合が結成され、現に活発な活動を開始し、沖縄も恐らく国連憲章によって信託統治に付される可能性が強い。(中略)沖縄の問題を考える時も、吾々はこの大きな展望の中に於て、方向を見出さねばならず、個人も各団体もこの潮流に乗じて善慮しなければならぬ<sup>114)</sup>。

と訴えている。

仲原は今後、沖縄の日本への復帰ではなく、国際連合による信託統治の可能性が高いとみている。国際連合によって主権国家の意思が制限され、国家の性格が変化していくと思われるので、沖縄人は封建性を脱して、「世界市民」(コスモポリタン)になるべきことを訴えている。

る<sup>115)</sup>。その後、現実には国際連合が国家のあり方を変えてしまうまでには至らなかったが、仲原はグローバリズムが浸透していくなかで、沖縄の生き残る道を模索すべきことを訴えていた。それは沖縄独立の道というよりも、世界市民化への道であった。

かつて仲原は『久米島史話』において、「堂のひや」のように久米島共同体にこだわることを強調した。このこだわりは戦時中に久米島の島民が日本軍に過剰に同調することの歯止めになった。したがって仲原には世界市民になることと、久米島の愛郷心を発揮することの間に、まったく違和感はない。仲原の沖縄人像は、日琉同祖論に基づく本土復帰の主張から、国連の信託統治の沖縄を想定して世界市民となるまで、大きく揺れ動いている。しかしこの振幅のなかで仲原には一貫する点があった。それは郷土久米島から生まれた歴史観である。

## 6 結びにかえて

明治以来、数多くの研究者が、沖縄の歴史と取り組んできた。多くの研究によって、それぞれの視点から沖縄史の特異性が解明されている<sup>116)</sup>。しかし全体として多くは、沖縄の通史を組み立てることに終始している。そのなかで仲原は、主にオモロ研究を通じて、歴史に視野を拡大し、沖縄史の認識にとって欠くことのできない時代区分の問題に取り組んだ。その過程で仲原は久米島の歴史をベースにして、独自の歴史観を確立していった<sup>117)</sup>。

仲原は皇国史観であれ、唯物史観であれ、特定のイデオロギーによって歴史をとらえることを嫌った。それは著書『久米島史話』が特定のイデオロギーと無縁なものであり、実証性を重視していたことでもわかる。これは郷土あるいは郷土の生活は、特定のイデオロギーによって表されるものではなく、久米島に埋もれている事実を淡々と解き明かすことに依るべきであるという仲原の考えが反映されている。

仲原は独自の歴史観から、沖縄と近代日本との関係について考えていく。仲原は、

人種・言語・風俗・習慣ともに、もとは同じものであったのが、永い間気候風土の違う土地に住み、永い間交通しなかった間に、いろいろの変化を来したのである。今日は永い永い間別れていた日本語に帰ったわけであるから、成る可く方言を捨てて正しい国語に熟達せねばならぬ<sup>118)</sup>。

と主張する。仲原は同時代の沖縄の知識人のなかでは、日本への同化傾向が強いようである。しかし日本への同化を積極的に推進しているわけではない。それはオモロ研究をはじめとする沖縄の言語や民俗に関するほう大な研究に着手していることからわかる。つまり沖縄の個性を描き出すことに、多くの時間と精力を費やしている。

仲原は同化と個性の両立を考えている<sup>119)</sup>。同化を強調する理由は、沖縄が差別されている



状況を、実質的に改善することにある。差別解消の手段として同化を強調する。しかし一方で、同化の目的は沖縄の個性を守るためにある。このような考え方は、仲原のみでなく同時代の沖縄の知識人に共通している。沖縄にとって、明治維新は遠いヤマトの出来事であったが、琉球処分は沖縄の伝統的な生活を脅かしかねない出来事となった。ここに同化の必要性和、同化を進める理由があった。

仲原は同化と個性の相克によって生まれる差別ないし劣等感の問題に注目する。仲原は「私たちの少年時代からのことを思いおこして見ると、沖縄でも本土でも、地域的の差別感が今よりもつよく、従って、それによる劣等感になやまされた人も少なくなかった、と思う」<sup>120)</sup>と語る。しかし「劣等感になやまされたことはない」と断言する仲原は、「差別的にあつかわれたこともあった記憶は残っていないが、どういうものか、故郷をあかすまいとした人は少なくなかったようだ」と語り、自身は沖縄出身であることに劣等感など覚えたことがないと強調する。

出身地を隠す沖縄人について、「生れ故郷というものは(中略)自分がえらんだものではなく、全く偶然のものである。誇る必要もなければ、卑下するのもおろかなことである。ましてや、これを気にやんで、暗い思いをするなどは馬鹿気た話である」<sup>121)</sup>という認識をもつ重要性を訴える。さらに「損得をいえば、キリがない。損があれば、これを埋め合わせるだけの努力をする外はない。奇異にかんじられるコトバ、風俗、習慣は、つとめて矯正することが、学習にも劣らぬ大切なことであろう」と語って、沖縄差別に抵抗する手段として同化を強調する。仲原自身は、まさに「奇異にかんじられるコトバ、風俗、習慣」の研究を行ない、内地の知的エリートと競争し、郷土の研究をゆるぎのないものとした。

仲原は個性の研究を通して、沖縄人と日本人との民族的な差異について考える。民族に関する客観的指標というよりも、「言語その他の文化の同じ人々が、自分等は祖先からみな同じ仲間だということを感じている時、その人々を何々民族と名付ける」<sup>122)</sup>と規定して、人々の自らの意識によってこそ、民族や人種が決定していると説明する。そして古琉球におけるヤマトとの一体感の強さに着目している。もともと仲原自身は沖縄民族というカテゴリーには消極的であった。仲原は、

結論を先きに言えば、沖縄民族と言う日本民族と区別するほどのものはないと、私共は考える。而しいやおれは日本民族ではない、沖縄民族だという人があれば、ただ苦笑するだけで、学問上まちがいだとは言わない。かりに八丈島の人が、おれは八丈民族だと云っても、左様ですかと云うだけである。自分は沖縄民族で非日本民族だと信じている人でも、どうか自分の感情を他の人に押し付けずにして貰い度い<sup>123)</sup>。

と訴えている。

仲原によれば、民族は結局、自己意識にもとづくものなので、沖縄民族という自己意識をもつ人がいることを否定しない。しかしその押し付けは困るという。仲原によれば、この民族意識が沖縄にとって重要なのではない。民族ではなく、

国民となると、明白なことばで一つの国に国籍を持っている人は、その国の国民である。日本国民といえは人種・民族の如何を問わず、日本に戸籍を持ち、憲法の条章による権利義務の主人となる人は皆日本国民である<sup>124)</sup>。

という。自己意識に基づく民族ではなく、法によって規定される国民を考えるべきであるという。

さらに仲原は国家について、

世界はだんだん国家というワクをゆるめる方向に進みつつあり、国際連合の成立により、主権の力も制限される方向に進みつつある。人種とか民族とかいろいろの差別感情は、古い時代の遺物で、人類相愛の理想へ眼を向け、人間を堅苦しく窮屈にする考え方は成る可く絶滅し、寛宏なのびのびした世界市民として生き度い。かかる考え方がわれわれ老壮年者は兎も角、われわれの後から来る若い人達に光明をあたえると、自分は考えている。沖縄に住む人々の将来を考える時にも、われわれは小さい国とか、民族とかに囚われない様にしたい<sup>125)</sup>。

と考える。仲原は民族や国家という枠組みを取り払い、沖縄人というカテゴリーを超克しようとしている。

仲原は沖縄がヤマトによって逆境におかれていたという点だけではなく、沖縄の支配層の下に、さらに抑圧されていた離島久米島の姿を描くことによって、その研究の出発点とする。そして久米島と首里王府、琉球（沖縄）と薩摩（ヤマト）、琉球（沖縄）とアメリカの、それぞれの関係性を研究することによって、そして何よりも久米島の原体験とオモロ研究を通じて、独自の歴史観ないし文化論を形成したといえる。その大きな特徴は、国家や民族を愛郷心に還元することによって、地域（国家）としての沖縄、民族としての沖縄人を超克しようとしている点にある。

## 注

- 1) 外間守善『沖縄の言葉と歴史』, 中公文庫, 2000年。
- 2) 小川徹「仲原先生のこと」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編『仲原善忠先生顕彰記念誌』, 仲原善忠先生顕彰事業期成会, 1997年, 204~6ページ)。
- 3) 拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成—個性と同化をめぐる—」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第42号, 2010年, 1~34ページ)。
- 4) 永積康安明・外間守善・(司会)大江健三郎「《座談会》沖縄学の今日的課題」(『文学』, 第40巻4号, 1972年, 385~6ページ)。
- 5) 亀井孝「仲原善忠氏をしのぶ」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 128~30ページ)。
- 6) 拙稿「比嘉春潮と沖縄研究の展開—インフォーマントとしての役割」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第46号, 2013年, 79~112ページ)。
- 7) 先行研究には, 仲原善忠『仲原善忠全集』全4巻(沖縄タイムス社, 1977~78年)をはじめ, 外間守善「仲原善忠先生の研究業績と著書論文目録」(『沖縄文化』, 第4巻17号, 1965年, 70~5ページ), 仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編『仲原善忠先生顕彰記念誌』(仲原善忠先生顕彰事業期成会, 1997年), 外間守善『沖縄学への道』(岩波現代文庫, 2002年, 110~24ページ), 萩原真美「地理教師としての仲原善忠」(『教職研究(立教大学教職課程)』, 第22号, 2012年, 1~11ページ)などがある。
- 8) 拙稿「東恩納寛惇と沖縄史学の展開」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第43号, 2011年, 14~46ページ)。
- 9) 中村哲「仲原先生の偉業」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 203~4ページ)。
- 10) 萩原真美, 前掲論文(注7), 2012年, 6ページ。
- 11) 「年譜」(仲原善忠『仲原善忠全集』第4巻, 沖縄タイムス社, 1978年, 640ページ)。以下では『仲原善忠全集』は『全集』と略す。出版社名および出版年(第1・2巻は1977年, 第3・4巻は1978年)も略す。
- 12) 仲原善忠「校注仲里旧記」「仲里旧記について」(『全集』第3巻, 151~229ページ)。外間守善「仲原善忠先生の人物と業績について」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 52~4ページ)。
- 13) 久米島の独自性や政治社会の起源を解明する上で, 『仲里旧記』と『具志川旧記』が貴重とされる。中村哲「久米島の政治起源—征服国家論の一検討として」(『沖縄文化研究』, 第31号, 2004年, 92~110ページ)。
- 14) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 1~150ページ)。
- 15) 仲村昌尚『久米島の按司物語』, 暁書房, 1994年, 28~9ページ。
- 16) 外間守善, 前掲書, 2000年, 185~201ページ; 来間泰男『グスクと按司—日本の中世前期と琉球古代(下)』, 日本経済評論社, 2013年, 105~36ページ。
- 17) 比嘉春潮「沖縄の歴史」(比嘉春潮『比嘉春潮全集』第1巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 21ページ)。
- 18) 村上呂里「宮良當社の柳田国男の問—言語教育論をめぐる—」(『琉球大学教育学部紀要』, 第68号, 2006年, 27~48ページ)。
- 19) 比嘉春潮「沖縄の歴史」(比嘉春潮, 前掲書, 1971年, 22~3ページ)。
- 20) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 34~5ページ)。
- 21) 佐藤優「沖縄・久米島から日本国家を読み解く」, 小学館, 2009年, 94~6ページ。
- 22) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 37ページ)。
- 23) 佐藤優, 前掲書, 2009年, 103~8ページ。佐藤優はこれを久米島における易性革命思想であるという。天は己に成り代わって王朝に地上を治めさせるが, 徳を失った現在の王朝に天が見切りをつけたとき, 革命(天命を革める)が起きるとされた。つまり血統の断絶ではなく, 徳の断絶が易性革命の根拠となっている。

- 24) 仲原善忠「久米島の按司伝説について」(『全集』第3巻, 85~106ページ)。
- 25) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 43ページ)。
- 26) 仲原善忠「セザ(霊力)の信仰について」(『全集』第3巻, 286~305ページ)。この論文は柳田の絶賛を受けたとされている。
- 27) 同上書, 299ページ。
- 28) 宮城栄昌『沖縄の歴史』, 日本放送出版協会, 1968年, 29~33ページ。
- 29) 仲原善忠「おもろ新釈」(『全集』第2巻, 168~9ページ)。
- 30) 島村幸一「『地方』で謡われたオモロ」(『講座 日本の伝承文学 八巻 在地伝承の世界』, 三弥井書店, 2000年); 仲原稜「『おもろさうし』にみる久米島の按司と地域とのかかわり」(『奄美沖縄民間芸学』, 第10号, 2011年, 67~76ページ)。
- 31) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 12ページ)。
- 32) 同上書, 26ページ。
- 33) 外間守善校注『おもろさうし(上)』, 岩波文庫, 2000年, 393~4ページ。
- 34) 島村幸一「久米島オモロの特殊性について—神女, 君南風を考察して」(『沖縄県史料編集室紀要』, 第25号, 2000年, 189~206ページ); 真喜志瑤子「『おもろさうし』にみる久米島出自の神々の変容とその歴史的背景—アオリヤへほかと「ヒキ」制度のかかわり」(『沖縄文化研究』, 第28号, 2002年, 205~58ページ)。
- 35) 沖縄県編『沖縄県史 第1巻 通史』, 沖縄県, 1977年, 18ページ; 高良倉吉『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて』, ちくま学芸文庫, 2012年, 203~28ページ。
- 36) 高良倉吉『琉球王国史の課題』, ひるぎ社, 1989年, 209~53ページ; 西村仁美『「ユタ」の黄金言葉—沖縄・奄美のシャーマンがおろす神の声』, 東邦出版, 2007年。
- 37) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 76ページ)。
- 38) 同上書, 17~21ページ。
- 39) 安里進「琉球王国の形成と東アジア」(豊見山和行編『日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界』, 吉川弘文館, 2003年, 84~115ページ); 赤嶺守「琉球王国」, 講談社選書メチエ, 2004年, 17~82ページ。
- 40) 外間守善校注, 前掲書, 2000年, 391ページ。
- 41) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 20~1ページ)。ただし11巻と21巻のオモロには違いがあり, 後者にはヤマトが出てこない。
- 42) 同上書, 23ページ。
- 43) 同上書, 24~5ページ。
- 44) 児島正男「芭蕉布, 久米島紬の生産形態—染織経営の原初的形態」(『鹿児島県立短期大学研究年報』, 第4号, 1976年, 1~17ページ); 上野和彦・石田則行「沖縄・久米島紬織物産地の存続とユイ」(『経済地理学年報』, 第56巻1号, 2010年, 16~30ページ)。
- 45) 仲原善秀「久米島の歴史」(沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』, 弘文堂, 1982年, 38ページ)。
- 46) 同上書, 40ページ。
- 47) 拙稿「沖縄の地方制度と報徳仕法—『一木書記官取調書』をめぐる」(『報徳学』, 第9号, 2012年, 105~24ページ)。
- 48) 新城俊昭『新訂・増補版 高等学校 琉球・沖縄史』, 東洋企画, 2002年, 116ページ。久米島の家譜については, 梅木哲人「久米島の諸家家譜記事の編年」(『沖縄文化研究』, 第10号, 1982年, 39~118ページ)。
- 49) 仲原善秀「久米島の歴史」(沖縄久米島調査委員会編, 前掲書, 1982年, 46ページ)。
- 50) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 59ページ)。
- 51) 一木喜徳郎「一木書記官取調書」(琉球政府編『沖縄県史 第14巻 資料編4 雑纂1』, 琉球政府, 1965年, 508~15ページ)。一木の地方自治構想については, 拙稿「一木喜徳郎の地方自治構想と青年団—報徳仕法の継承」(『報徳学』, 第9号, 2012年, 87~103ページ)。

- 52) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 64~5ページ)。
- 53) 分島問題とは、日清両国間の外交交渉の場で、琉球帰属をめぐる日本側から宮古・八重山両島を清国に割譲しようとした問題である。
- 54) 具志川村史編集委員会編『久米島具志川村史』, 具志川村役場, 1976年, 404~5ページ。
- 55) 外間守善「仲原善忠先生の研究業績と著書論文目録」(『沖縄文化』, 第4巻17号, 1965年, 70~5ページ)。
- 56) 外間守善「あとがき」(『全集』第4巻, 676ページ)。
- 57) 伊波普猷「日本文学の傍系としての琉球文学」(伊波普猷『伊波普猷全集』第9巻, 平凡社, 1975年, 10ページ)。田島利三郎(1870-1931)はオモロ研究の先駆者であった。田島利三郎については、与那原恵『まれびとたちの沖縄』, 小学館101新書, 2009年, 5~72ページ。
- 58) 伊波普猷「日本文学の傍系としての琉球文学」(伊波普猷, 前掲書, 1975年, 11ページ)。
- 59) 外間守善「『おもしろさうし』概説」(外間守善校注『おもしろさうし(下)』, 岩波文庫, 2000年, 448ページ)。
- 60) 同上書, 452ページ。
- 61) 吉成直樹「久米島と琉球国—久米島おもしろの世界」(村井章介・三谷博編『琉球からみた世界史』, 山川出版社, 2011年, 58~73ページ)。
- 62) 仲原善忠「おもしろ新釈」(『全集』第2巻, 115~438ページ)。
- 63) 同上書, 137~8ページ。
- 64) 仲原善忠・外間守善『おもしろさうし辞典・総索引』, 角川書店, 1967年, 84ページ。
- 65) 仲原善忠「おもしろの研究—おもしろ研究の方向と再出発」(『全集』第2巻, 73~110ページ)。
- 66) 同上書, 85ページ。
- 67) 仲原善忠「沖縄現代政治史」(『全集』第1巻, 459~84ページ); 仲原善忠「沖縄現代産業・経済史」(『全集』第1巻, 485~529ページ)。
- 68) 仲原善忠「琉球の歴史」(『全集』第1巻, 1~175ページ)。
- 69) 歴史観については、拙稿「真境名安興と沖縄史学の形成」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第45号, 2012年, 1~34ページ)。
- 70) 中山盛茂「故仲原先生を憶う—著書『琉球の歴史をめぐる』」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 179~81ページ)。
- 71) 金城正篤「『琉球の歴史』りゅうきゅうのれきし」(沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典下巻』, 沖縄タイムス社, 1983年, 913ページ); 来間泰男『グスタクと按司—日本の中世前期と琉球古代(上)』, 日本経済評論社, 2013年, 7~19ページ)。
- 72) 仲原善忠「十六世紀末における薩琉間の緊張をめぐる」(『全集』第1巻, 631ページ)。
- 73) 同上書, 639~40ページ。薩摩・幕府・中国のそれぞれと向き合う琉球の緊張関係のなから、多岐にわたる琉球の姿がつけられたという研究がある。グレゴリー・スミッツ著/渡辺美季訳『琉球王国の自画像』, ぺりかん社, 2011年, 35~80ページ)。
- 74) 仲原善忠「島津進入の歴史的意義と評価」(『全集』第1巻, 238~75ページ)。
- 75) 大田昌秀「大先輩仲原善忠先生を偲ぶ」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 163~5ページ)。大田自身も久米島出身である。
- 76) 渡口真清「先生と十年」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 168~70ページ)。
- 77) 仲原善忠「砂糖の来歴」(『全集』第1巻, 276~373ページ)。
- 78) 仲宗根政善「仲原先生をしのぶ」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 173~6ページ)。
- 79) 仲原善忠「『砂糖の来歴』補遺」(『全集』第1巻, 374~458ページ)。
- 80) 仲原善忠「ペリー提督の手紙—附 オランダいものこと」(『全集』第1巻, 595~603ページ)。
- 81) 『琉球の歴史』はジョージ・カーが1952(昭和27)年に米国民政府民政長官の依頼によってまとめた琉球史に関する調査報告の翻訳である。翻訳版は1956(昭和31)年に米国民政府によって発行され、沖縄の各市町村に無償配布された。琉球大学では琉球史のテキストとして用いられた。宮城悦

- 二郎『琉球の歴史』りゅうきゅうのれきし(沖縄大百科事典刊行事務局編、前掲書、1983年、913ページ)。
- 82) 仲原善忠「ペリー提督の手紙—附 オランダいものこと」(『全集』第1巻、595～6ページ)。
- 83) 同上書、596ページ。
- 84) 宮地正人『幕末維新変革史(上)』、岩波書店、2012年、97～100ページ。
- 85) 土屋喬雄・玉城肇訳『ペリリ提督日本遠征記(二)』、岩波文庫、1948年、8ページ。
- 86) 奥那覇潤『翻訳の政治学—近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』、岩波書店、2009年、76～7ページ。
- 87) 仲原善忠「ペリー提督の手紙—附 オランダいものこと」(『全集』第1巻、596ページ)。
- 88) 同上書、598ページ。
- 89) 同上書、598ページ；仲原昌徳「憧憬と忠義と暴力と—ペリー来航と沖縄の作家」(『日本東洋文化論集』、第12号、2006年、59～85ページ)。
- 90) 仲原善忠「ペリー提督の手紙—附 オランダいものこと」(『全集』第1巻、598～9ページ)。
- 91) 同上書、599ページ。
- 92) 同上書、600ページ。
- 93) 同上書、601ページ。
- 94) 土屋喬雄・玉城肇訳、前掲書、1948年、97ページ。
- 95) S・W・ウィリアムズ著／洞富雄訳『ペリー日本遠征随記』、雄松堂書店、1970年、128ページ。
- 96) 高良倉吉・玉城朋彦編『ペリーと大琉球』、琉球放送株式会社、1997年；紙屋敦之「王国末期首里王府の異国人対応と薩摩藩」(深谷克己編『東アジアの政治文化と近代』、有志舎、2009年)。
- 97) 真栄平房昭「十九世紀の東アジア国際関係と琉球問題」(溝口雄三ほか編『アジアから考える3周縁からの歴史』、東京大学出版会、1994年、243～71ページ)；同「近代日本における境界の島々—琉球・沖縄海域の視点から」(『歴史学研究』、第908号、2013年、12～9ページ)。
- 98) 佐藤優、前掲書、2009年、235～9ページ。
- 99) 仲原善忠「ペリー提督の手紙—附 オランダいものこと」(『全集』第1巻、602ページ)。
- 100) 仲原善忠「史観・史学随想」(『全集』第1巻、572ページ)。
- 101) 同上書、583ページ。
- 102) この点で戦後のアメリカと沖縄の関係も再考の余地がある。惠隆之介『沖縄を豊かにしたのはアメリカという事実』、宝島社新書、2013年。
- 103) 久米島からブラジルへの移民については、西川大二郎「沖縄県久米島具志川村における海外出移民—特に中南米移民—の特性について」(『法政大学教養部紀要』、第63号、1987年、59～89ページ)。
- 104) 仲原善忠「ブラジル在留の沖縄出身の皆様に告ぐ」(『全集』第4巻、595～9ページ)。
- 105) 佐藤優、前掲書、2009年、280～92ページ。
- 106) 仲原善忠「ブラジル在留の沖縄出身の皆様に告ぐ」(『全集』第4巻、596ページ)。
- 107) 大城立裕『内なる沖縄・その心と文化』、読売新聞社、1972年、77～8ページ。
- 108) 大田昌秀・新川明・稲嶺恵一・新崎盛暉『沖縄の自立と日本—「復帰」40年の問いかけ』、岩波書店、2013年、197～8ページ。
- 109) 仲原善忠「ブラジル在留の沖縄出身の皆様に告ぐ(続)」(『全集』第4巻、599～601ページ)。
- 110) 同上書、600ページ。
- 111) 平恒次「沖縄独立—地域主権革命の延長戦上で」(『環』、第43号、2010年10月、120～3ページ)。  
沖縄の「自治」と「独立」をめぐる、現在、多くの議論がある。大田昌秀・新川明・稲嶺恵一・新崎盛暉、前掲書、2013年、186～216ページ。沖縄独立論については、比嘉康文『沖縄独立の系譜—琉球国を夢見た6人』、琉球新報社、2004年；松島泰勝『琉球独立への道—植民地主義に抗う琉球ナショナリズム』、法律文化社、2012年。
- 112) 仲原善忠「沖縄人と封建性」(『全集』第4巻、464～5ページ)。
- 113) 同上書、465ページ。
- 114) 同上書、466ページ。

- 115) 世界人主義やコスモポリタンという概念は、すでに大正期から、伊波の弟で沖縄毎日新聞社の記者であった伊波月城(1880-1945)や、大正中期にハワイに伝道牧師として渡った比嘉静観(1887-1985)によって展開された。比屋根照夫「混成的国家への道—近代沖縄からの視点」(キャロル・グラックほか著『日本の歴史 第25巻 日本はどこへ行くのか』, 講談社, 2003年, 161~92ページ)。
- 116) 近年はヨーロッパにおいても沖縄研究が盛んであるという。安里英子「沖縄の日本「復帰」とヨーロッパの沖縄学」(『環』, 第52号, 2013年1月, 216~9ページ)。
- 117) 小川徹「仲原先生のこと」(仲原善忠先生顕彰記念誌編集委員会編, 前掲書, 1997年, 204~6ページ)。
- 118) 仲原善忠・仲原善秀共編「久米島史話」(『全集』第3巻, 5ページ)。
- 119) この点では伊波と同じである。拙稿, 前掲論文(注3), 2010年, 25~8ページ。
- 120) 仲原善忠「劣等感のこと」(『全集』第4巻, 538ページ)。
- 121) 同上書, 540ページ。
- 122) 仲原善忠「沖縄人とは一人種・民族・国民」(『全集』第4巻, 586ページ)。国家や政治との関連で、「民族」については、矢部貞治『政治・民族・国家の話』, 講談社学術文庫, 1980年, 70~86ページ。
- 123) 仲原善忠「沖縄人とは一人種・民族・国民」(『全集』第4巻, 586ページ)。
- 124) 同上書, 586ページ。
- 125) 同上書, 587ページ。

# Zenchu Nakahara and the Development of Okinawan Studies

—the Historical View based on the Native District—

Nobuhisa NAMIMATSU

## Abstract

Zenchu Nakahara (1890-1964) is a representative researcher of modern Okinawan history and geography. He was a prominent “OMORO” researcher. He was born in Kumejima of Okinawa. He worked as a school teacher of geography in the earlier period of the war. He worked on a history study initiated by “OMORO” study from around 1939. He introduced a series of historical studies including the book “Kumejima historical anecdotes”. His historical study contained an original historical view and idea of culture which came out of the prototypical experience of Kumejima. He clarified that Okinawa was not only established in adverse circumstances by Yamato (Japan), but also that Kumejima was suppressed by the ruling stratum of Okinawa.

The study focuses on four characteristics in the Okinawa history of Nakahara. (1) the local boss and ruling system, (2) the unity of the religion and state system of the Ryukyu kingdom, (3) the change of the economic infrastructure of Kumejima, (4) the local government officials of Kumejima and the bureaucratic system. Kumejima “OMORO” studies made these characteristic cases.

Furthermore, the historical research of Nakahara conceived the situation of postwar Okinawa, as seen in the following four points. (1) the division of Okinawan history into positions, (2) the relations of Ryukyu and the Satsuma feudal clan, (3) the Perry visit and the postwar United States Armed Forces occupation, (4) the Brazilian migrant “winners”. His research took on a Modernism-like aspect, but the foundation of his study was a historical view born from Kumejima.

**Keywords:** Zenchu Nakahara, Okinawan History, Kumejima, OMORO Study, Historical View